

指導資料

# 通常の学級で行う特別な支援の在り方

—授業や学級経営の中で行う特別支援教育—



平成 21 年 4 月

宇都宮市教育センター

## 目次

### 目次

#### (1) 学習に関すること

学習①	Q1	字を書くことが苦手な子	1
学習②	Q2	漢字を書くことが苦手な子	3
学習③	Q3	アルファベットを書くことが苦手な子	5
学習④	Q4	文章の読み取りが苦手な子	6
学習⑤	Q5	計算が苦手な子	7
学習⑥	Q6	算数の文章題が苦手な子	9
学習⑦	Q7	創作・表現活動が苦手な子	11
学習⑧	Q8	グループ活動が苦手な子	14
学習⑨	Q9	離席をしてしまう子	15
学習⑩	Q10	私語が多い子	17
学習⑪	Q11	授業妨害（奇声、授業に関係のない言動）をする子	18
学習⑫	Q12	学習に意欲が持てない子	19
学習⑬	Q13	集中して学習に取り組めない子	21
学習⑭	Q14	指示に従えない子	24
学習⑮	Q15	周囲の子どもたちへの配慮	25

#### (2) 生活に関すること

生活①	Q16	整理整頓や持ち物の準備等が苦手な子	27
生活②	Q17	集団生活でみんなのペースについていけない子	30
生活③	Q18	友だちへの暴言や暴力が見られる子	32
生活④	Q19	友だちにかかわれない、集団活動に取り組めない子	35
生活⑤	Q20	周囲の子への受容を促す手だて	36
生活⑥	Q21	友だちとのコミュニケーションが苦手な子	37
生活⑦	Q22	自己中心的な発言や行動をする子	39
生活⑧	Q23	話を作ったり、うそをついてしまったりする子	41

#### (3) 家庭環境に関すること

家庭①	Q24	基本的な生活習慣改善のための家庭との連携	43
家庭②	Q25	特別な支援が必要な子の保護者の理解を得るために	45
家庭③	Q26	虐待が疑われる子	47
家庭④	Q27	関係機関との連携	48

#### 参考文献

#### 調査研究員一覧



## 学習に関すること①

### Q1. 字を書くことが苦手な子への指導の手だては？



#### つまずきの背景

- 他の子と同じ速さで字を読んだり書いたりできない  
入学前の平仮名の読み書きの個人差がかなりあるため、授業や日常生活の中で他の子に遅れがちになってしまう場合があります。
- 語彙が少なかったり、字が雑だったりしてうまく字をなぞれない  
読書量の差や言葉に対する興味関心の差によって、日常生活の会話や読み書きに大きく差が出てしまう場合があります。また、下手でも読めればよいというような字に対する無関心さから、雑に書いてしまう場合もあります。

#### 手だて

- **連絡帳等を利用して、早めの実態把握をしてみましょう**  
帰りの会などで、早い時期から少しずつ連絡帳を書かせながら、実態把握をすることが大切です。書けない子には教師が書いたものをなぞらせましょう。
- **文字指導、語い指導の時間を国語の時間に明確に位置づけましょう**  
漢字ドリルの学習や本の読み聞かせ、ノートへの言葉の視写など文字指導、語い学習の時間を位置づけ、少しずつ、繰り返し指導することが有効です。
- **教育情報機器を活用してみましょう**  
子どもたちは一生懸命書いているのに、自分の間違いになかなか気づかない場合があります。このようなとき、デジタルカメラなどの活用が効果的です。



#### 授業の中で

- **入学当初の子どもたちの文字の読み書きの実態をできるだけ早く把握する**  
文字の指導に関しては、入学前、ご家庭に名前の読み書きだけはできるようにお願いすることが多いようです。入学してからの文字指導は、一般的に、国語や書写、ひらがなドリル等の学習の進度に応じて指導していきます。しかし、現在の社会の状況は、幼稚園や保育園、家庭での学習で、だいたいのひらがなの読み、半分程度の書きを修得して入学してくる子どもたちが多いようです。  
具体的な実態把握の方法としては、入学翌日から始まる入門期に、次の日の連絡等を連絡帳に写させることが挙げられます。短い言葉や文であれば、多くの子どもがそれほど苦勞なく写します。字があまり書けない子には教師が連絡帳に字を薄く書いてやり、それをなぞらせたり、できるところまで書かせその続きを書いてあげたりするといいいでしょう。三日程度で、一人一人の実態がつかめます。つまずきのある子どもへの個別指導は、ここからスタートします。  
実態をつかむことなく、丁寧過ぎる一斉指導をしていくことは、できる子を待たせるだけでなく、つまずきのある子どもを集団の中に埋没させてしまう可能性があるのです。

## ○ ひらがなドリルなどで練習する場合〔1・2年生〕

まず、週に8時間ある国語の授業のどこで文字指導をするのかを明確にしましょう。学習時間も15分程度と短くします。それを子どもたちにもわかるように時間割に位置づけましょう(週3回×15分程度)。そうすることで、一週間の国語の学習にリズムができるとともに、学習の成果が語いの獲得として具体的に累積されていきます。字を書くことが苦手な子どもにとっても目安がはっきりします。

次に、学習の流れとしては、いきなりドリルに書かせたりせず、学習する字を大きく黒板に書いたり小黒板などで提示したりし、視覚的に捉えられるようにします(1回に2字程度)。そして、その字で始まる言葉をたくさん発表させ板書します。カタカナの言葉も、今後の学習のために、どんどんカタカナで板書するようにします。その後、指書き、空書き等をして全員で筆順を確認し、ドリルに書かせていきます。発表された言葉を模造紙などに板書しておけば教室掲示にも利用できるでしょう。

つまずきのある子どもも、教師が板書したたくさんの言葉を目にすることで、自然と語彙が増えていきます。ドリルに書くときは、1字分ずつ教師が丸をつけてあげたり、見せに来させたりするといいでしょう。他の子どもたちには、「最高の字で書きましょう」と、丁寧に書くことの大切さを伝えるとともに、次の学習の指示もおきましょう。15分できちんと区切り、終わらないときには、分量を調整しましょう。子どもたちは、週3回、6字の学習を繰り返すことで、関連した言葉もどんどん吸収していきます。

## ○ ノートへの視写による指導

教科書で学習した内容や、本の読み聞かせで出てきた言葉などをノートに視写する学習は、個別の支援のチャンスです。

子どものノートと同じマス目のマグシート黒板を用い、1時間ごとに5つ程度の言葉を板書します。教師の字をまねさせ、丁寧にノートに写させていきます。その際、「形がうまくとれない字は先生に書いてもらいましょう」と全体に伝え、進んで子どもたちが教師に字の指導をお願いする雰囲気を作っていきます。挙手をして教師に指導をお願いした子どもをほめるとともに、その子のノートに薄く書いてなぞるよう伝えます。机間指導をしながら、特につまずきのある子のノートには、丁寧な字を1文字でも見つけて丸をつけてあげましょう。

## ○ なぞり書きができない子への情報機器を活用した指導

何度やってもひらがなドリルや書写ノートのなぞり書きができない子が、どの学級にもいることでしょう。その子どもの性格や筆圧の問題等、その原因はいくつか考えられますが、もしかしたら、自分の鉛筆の先が見えていないことが、大きな原因になっているのかもしれません。子どもが字を書いているところを真上からのぞいてみると、右手の位置と頭の位置が一目でわかります。右手と頭の位置を正しい位置にずらしてやり、鉛筆の先となぞり書きの点線を意識させます。

しかし、一度ついた癖はなかなか直りません。そのときは、実物投影機やデジカメを使った指導が効果的です。実物投影機やデジカメ(カメラモード)をテレビやプロジェクターにつなぎ、書いている子どもの目線で撮影します。鉛筆の先が手で隠れてしまったり、きちんとなぞり書きの点線の上をすべっていったりする様子が実際の映像で確認できます。子どもたちは、その映像にはっとして、かなりの子がきちんとなぞり書きができるようになります。さらに、つまずきのある子どもへは、正しい目線の位置をデジカメで撮影し、見せてあげると効果的です。



## 学習に関すること②

### Q2. 漢字を書くことが苦手な子への指導の手だては？



#### つまづきの背景

- 漢字学習への関心が低い
- 漢字の成り立ちや意味・熟語の構成等への理解が不十分である
- 漢字練習に苦痛を感じる
- 指先の力のコントロールがうまくいかない（手先が不器用）
- 目で見たものの形をとらえて記憶することが苦手である

#### 手だて

- 漢字テストを工夫してみましょう
- 漢字スピーチ（漢字の先生）を企画してみましょう
- 使いやすい鉛筆，消しゴムを用意させましょう
- 書く量，ワークシート枠の広さなどを調整しましょう
- 「へん」や「つくり」は分解して説明しましょう
- 日常で使用する頻度の高い漢字は，カードにしてあらかじめ渡しておきましょう

#### 授業の中で

##### ○ 漢字テストの工夫

漢字テストを授業に位置づけ，出題範囲を短くすることで苦手な子への負担が軽減されます。

また，漢字を出題する際は，その熟語だけでなく文章として出題し，子どもたちがその漢字や熟語の使い方を意識できるようにします。採点は多少甘くしても，とにかく自信とやる気をもたせることが一番大切です。

##### ○ 漢字スピーチ（漢字の先生）

これは，漢字学習の本を何冊も出している卯月啓子先生の実践です。

まず，漢字ドリルの新出漢字をクラス全員に一人一つずつ分担して担当させます（卯月先生はこれを「漢字をみんなに売る」と表現しています）。

次に，画用紙を配り，発表用紙の作り方を説明します。読み方・意味・筆順・成り立ち・熟語や用法・部首などを工夫して書くように伝えます。

色ペンやイラストなども工夫させて楽しく学習していけるようにします。

週に2回ほど，授業のはじめの5分間に漢字スピーチを位置づけ，2人くらいずつ発表させていきます。発表は，調べたことの中から一番大切なことや間違えやすいことを簡潔に発表させます。また，空書きによる筆順指導も担当した子どもたちにさせて，他の子どもたちにまねをさせます。つまり，担当した子が「漢字の先生」になるのです。

空書きのあと，スピーチの締めくくりとして，「5回ずついいねいにノートに練習してください」

熟語	成り立ち	意味	現
	・	・	・
	・	・	・
	・	・	・
部首			ゲン・あらわれる

と言い、教師とともに子どもたちの練習しているところを見て回り、筆順の間違いを正したり上手な子に○をつけてあげたりさせます。このとき、教師は、漢字を苦手に行している子どもを重点的に指導します。

この方法は、発表が苦手な子も発表用紙が手元にあるので安心して話すことができ、また、自分の調べた漢字をみんなが練習してくれる喜びも味わうことができます。また、週に4つ程度の新出漢字の学習が確実にでき、発表後は、その用紙を教室掲示することで言語環境も整っていきます。一斉指導の中でのとても簡単な漢字指導、ぜひ、お試しください。

#### ○ 漢字の部分に目を向けて

訓読みの「訓」なら「言」(げん)と「川」(かわ)に分けて説明をしながら板書させるなどの工夫も一つの方法です。

#### ○ 漢字カードの作成

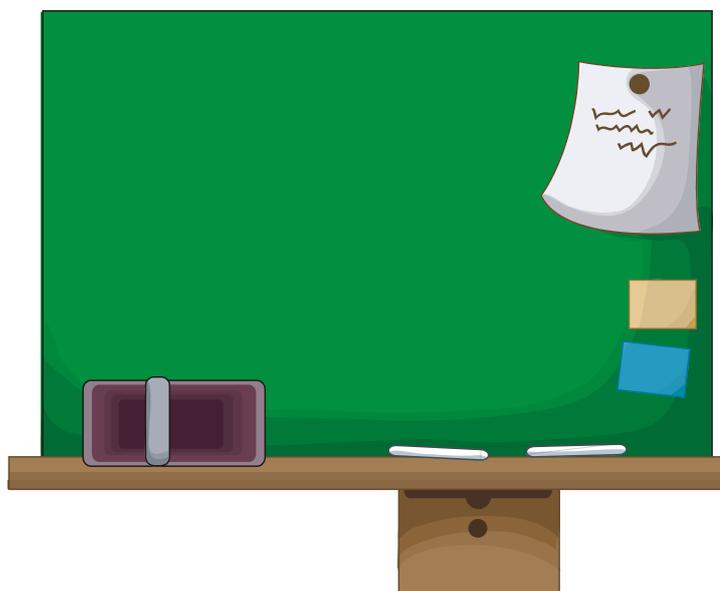
「～と考える」「～と思う」「～を食べる」「～を読む」など、日常で使用する頻度の高い漢字などを集めた漢字カードを作成し、あらかじめ渡しておくことも効果的です。黒板の板書、作文の指導のときなどにも使用可能です。

#### ○ 漢字練習・視写の工夫

漢字の練習や板書事項の書き取りの際に、あらかじめ生活上必要性の高い漢字に印をつけて、そこからノートに書かせてみましょう(書くことが苦手な子には、印をつけた漢字のみ書かせるのも一つの方法です)。ほかの子どもたちにとっても、必要性の高い漢字をしっかりと覚えることになり、クラス全体の漢字に対する興味が高まります。

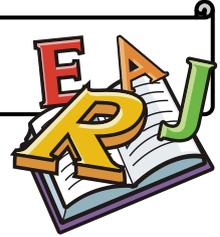
#### ○ 活用上の配慮

ワークシートやカードは、該当する生徒だけに特別に用意するのではなく、自分で使いたいと思う子は誰でも使えるような配慮が必要です。自分から特別なものを選んだ子の中には、自分も支援を受けたいと思う子もいると考えられるからです。



## 学習に関すること③

### Q3. アルファベットを書くことが苦手な子への指導の手だては？



#### つまずきの背景

- 空間の位置関係をとらえることが難しく、物の形をとらえることができない
- 手先に不器用さがあり、書くことが苦手である

#### 手だて

- 書く気持ちになるようにしましょう
- 覚えやすいようにサポートしましょう
- 練習の量や仕方を工夫しましょう
- 提示の仕方やワークシート（ノート）を工夫しましょう
- 不器用さを克服するために、なぞりの練習をしてみましょう（レディネスとして）

#### 授業の中で

- やる気を持続させるために…
  - ・ まずは書いたことをほめてあげましょう。
  - ・ 正確な形や正しい筆順などはある程度気にしないようにしましょう。
- ウォームアップとして…
  - ・ 手指のほぐし運動として、線結び、迷路、曲線なぞりなどを取り入れてみましょう。
- 導入時の支援として…
  - ・ 文字と音を一致させるために、文字の音を言いながら書かせてみましょう。
  - ・ イメージしやすいヒントを工夫しましょう。（例）f ← 「ステッキみたい」、i ← 「ポー、チョン！」
  - ・ p と q などの混同については、一画ずつ別の色づけをして視覚的にとらえさせます。  
（例）l の部分は青、c の部分は赤
  - ・ 指を使って、机または空中に文字を書く活動を取り入れてみましょう。
- 練習への抵抗をなくすために…
  - ・ 「同じ文字を繰り返し10回ずつ」のような羅列ではなく、3文字くらいを組み合わせ、「a b c, a b c」のようにリズムカルに言いながら書くなど、練習方法を工夫しましょう。
  - ・ 1枚のプリントの書く量を減らして、確実に終わるようにし、達成感を味わわせるようにします。
  - ・ 黒板を写すのが苦手な子には、手本を机上におき、それを見ながら書かせることで、書きやすくなります。
  - ・ 小さく書くのが苦手な子には、大きな罫線用紙を用意します。すぐに紙面が埋まり、意欲にもつながります。
- 日頃から…
  - ・ アルファベットのかるたカードを教室に常備するなど、休み時間などに生徒が自主的に文字に触れられる環境を作ってみましょう。
  - ・ 入門期の授業では少しでも英習字の時間を設けるようにし、書けるようになったという達成感と自信をもたせることもとても大切なことです。

## 学習に関すること④

### Q4. 文章の読み取りが苦手な子への指導の手だては？



#### つまづきの背景

- 読む場所が目で追えない
- 文節のまとまりを把握できない
- 言葉や単文レベルの意味が理解できない
- 部分と部分（または全体）の関係を理解するのが難しい
- 指示語がわからない

#### 手だて

- 学習の補助器具を工夫して製作してみましょう
- 文節のまとまりを教師が意識して少しずつ与えるようにしましょう
- 漢字が読めないために、読み進めない場合はふりがなを書くように指導してみましょう
- 高学年や中学生の場合は、教科書やプリントを拡大して行間を広げたものを使用してみましょう
- 他の子どもの前で読ませる場合は、読み取りやすいところを扱うようにしてみましょう

#### 授業の中で

- 教科書の一行分の幅にくりぬいたシートを使用してみましょう  
読むところ以外の文字が見えないので、読み間違いや行飛ばしが少なくなります。

わたしの国では、米作りを中心にした文化が・・・・・・・・

さらに、読むところを指でなぞらせながら読ませるのも単純ですが効果的です。

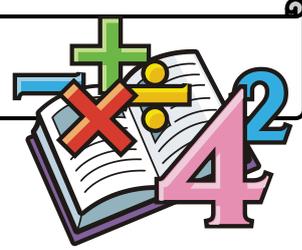
- 文節の区切りをわかりやすくしてみましょう  
最初範読をして聞かせ、文意をつかませたうえで、言葉の区切りごとに印をつけるなどの方法が考えられます。

スーホーは / とても / 歌が / うまく /  
慣れてきたら、友人が読んでいる部分の言葉を区切ることに挑戦させてみます。

- 音読や読み取りなど、その子の力で達成できる場所を分担させましょう  
指名読みでは分量の少ないところ、全員で音読したところを割り当てると漢字や言葉の区切りに抵抗が少なくなり、読むことに自信をもてるようになります。自信がもてたら少しずつ読む量を増やし抵抗感を除いていきます。

## 学習に関すること⑤

### Q5. 計算が苦手な子への指導の手だては？



#### つまづきの背景

- 数の概念が身に付いていない
- 短期記憶が弱い
- 視覚的な認知が弱い
- 暗記することが苦手

#### 手だて

##### ○ 視覚的な教材や具体物を利用してみましょう

数図カードやおはじきなどの具体物を操作しながら、数の概念や操作の仕方が理解できるようにします。視覚的な教材や具体物が、頭の中で具体的にイメージ化され、理解につながるでしょう。

##### ○ 計算用紙を工夫してみましょう

マス目のある用紙を使い、計算するときの位取りをわかりやすくしたり、計算用紙を工夫して、繰り上がりや繰り下がりを書く場所をはっきりさせたりする方法も有効です。

##### ○ 計算方法を言語化させてみましょう

計算の手順を言葉で言ったり、数字や言葉に意味づけしたりしていくことで、計算方法が身に付くようにします。

26	① 一の位から計算する。
+38	5+8=13 一の位は3
26	② 1十の位に繰り上がる。
	③ 十の位を計算する。…

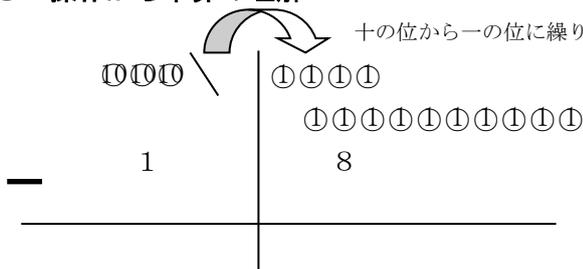
##### ○ 電卓や九九表などの使い方を教えてみましょう

計算の桁数が増えてくると、ますます混乱してしまう子どももいます。電卓を利用させたり九九表を手元に置かせたりすることで、正確に計算していく方が有効な場合もあります。自分なりの方法として指を使うことなどもとがめず、認めてあげることです。

#### 授業の中で

筆算で考え、答えをもとめてみましょう。  $34 - 18 =$

##### ○ 操作から筆算の理解



実際におはじきなどの操作を通して、筆算の仕組みや繰り下がり(14-8)になることを理解させます。

指を使って解くことなどもとがめず、自分なりの方法を認め、計算への意欲がそがれないようにすることも大切です。

○ 計算用紙の工夫

	十の位	一の位
	② 8	① 4
—	1	8
	1	6

位取りを間違えないように、マス目の用紙で計算してみましょう。  
繰り下がった数は、赤ペンで書いておきましょう。



※ 繰り下がりの数をなるべく近くを書く方が、短期記憶の弱い子には有効です。  
繰り上がりや繰り下がりの数を、赤ペンなど目立つ色を使わせることも有効です。

○ 計算方法の言語化

- ・  $34 - 18 =$  一の位から計算
- ・  $4 - 8$  は、引けないので十の位から繰り下げる
- ・ 十の位は、②になる  $14 - 8 = 6$
- ・ 十の位は  $2 - 1 = 1$
- ・ 答えは、16

計算の仕方を声に出して確かめながら解いてみましょう。



○ 電卓や九九表の使用

計算をしたら電卓で答えの確かめをさせます。自力で自分の計算の間違いにも気づくことになります。

かけ算では、九九表を手元において問題に取り組むことも有効です。九九が覚えられないことを責めるのではなく、出来ることを増やしてあげることです。

×	1	2	3	4	5	6	7
1	1	2	3	4	5	6	7
2	2	4	6	8	10	12	14
3	3	6	9	12	15	18	21
4	4	8	12	16	20	24	28
5	5	10	15	20	25	30	35
6	6	12	18	24	30	36	42
7	7	14	21	28	35	42	49

九九表から、答えを見つけごらん。

	5	7
×		3
	② 1	



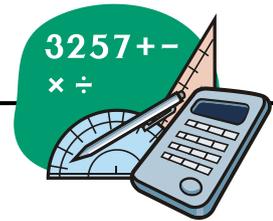
○ 課題の量の加減

計算問題の数を少なくすることで学習に対する抵抗感をなくし、「できそうだ。」という思いをもたせるようにします。

できることを増やしてやり、少しでも達成感もてるような学習方法の工夫を図っていくことが大切となるでしょう。

## 学習に関すること⑥

### Q6. 算数・数学の文章題が苦手な子への指導の手だては？



#### つまづきの背景

- 言葉の意味が分からず、問題の意味を理解することが困難  
文章に使われている言葉そのものの意味を理解できないために、どのような式を作るかがわからないことが考えられます。特に、「加える」「増える」「減る」「足りない」「倍になる」など式を立てる上でキーワードとなる言葉の意味理解ができないために、式が正しく立てられない場合があります。
- 文章をきちんと読むという姿勢が育っていない  
文章を読むこと自体が面倒で、きちんと読もうとしないことがあります。また、さらっと読み流しただけで、「どうするの?」「どういう意味?」「何算?」などと聞いてきて、自分で考えようとしていない場合も多いようです。
- 長い問題文や2～3段階の思考を必要とする問題のイメージがつかめない  
文章の中から、必要な情報だけを取り出して、相互に関連づけたり、自分の経験に照らし合わせたりして、その文章から自分なりのイメージを作ることが難しいために、式が立てられないことが考えられます。

#### 手だて

- **問題文をじっくり読み取る姿勢を育てましょう**  
問題文をゆっくり声に出して読ませたり、ノートにていねいに写させたりして、時間をかけてじっくり読み取ることを習慣づけます。また、「目で読むこと」が弱い子の中には、「聞くこと」で問題を理解する子もいます。教師や友だちが、声に出して問題を読んで聞かせてあげることも有効となります。
- **問題場面の提示の仕方を工夫しましょう**  
言葉の意味と算数の場面が一致していないことが考えられます。文章による提示だけではなく、具体物や場面絵を示しながら問題場面を理解できるようにするとよいでしょう。
- **文章題の構造を正しく把握し、内容を正しくイメージできるようにしましょう**  
文章の内容を具体物で操作させたり、図に置き換えたりして、問題文の内容を再現させます。再現する際には、できるだけ自分の言葉で説明させ、内容の理解を助けるようにします。複雑な問題文を短く簡単な文に直したり、分かりやすいように内容を整理して示したりして、理解できるようにします。
- **文章題に出てくる言葉を正しく理解できる力を育てましょう**  
「増える」「もらう」は+、「減る」「あげる」は-など、キーワードを決めておき、問題文からキーワードを探す習慣をつけて、何算かを考えさせるようにすることも有効でしょう。  
また、具体物操作と関連させ、「増える・もらう」は、 $\boxed{\bigcirc\bigcirc\bigcirc}\leftarrow\boxed{\bigcirc\bigcirc}$  , 「減る・あげる」は、 $\boxed{\bigcirc\bigcirc\bigcirc}\bullet\bullet\rightarrow\bullet\bullet$ など、動作化と結び付けた演算決定の理解を図っておくことも大切でしょう。

## 授業の中で

例えば、中学1年生の1次方程式の利用の授業でどのような支援が可能かを例に挙げてみます。

ハンバーガーを5個と1本160円のジュースを3本買ったなら、代金の合計が1530円になりました。ハンバーガー1個の値段を求めなさい。

○ **分かっていることと、求めることを区別させます**

《アンダーラインを引く方法》 分かっていること 求めること

ハンバーガーを5個と1本160円のジュースを3本買ったなら、代金の合計が1530円になりました。 ハンバーガー1個の値段を求めなさい。

上記のように、分かっていることと求めることを区別し、求めることをxを使ってあらわすことを伝えます。

《表にまとめる方法》

	ハンバーガー	ジュース	合計
1個の値段	?	160円	
買った個数	5個	3本	
代金	?	160円×3本	1530円

上記のような枠をあらかじめ用意し、分かっていることと求めることを区別ができるようにします。表が埋められないところが何箇所かある場合は、何をxとおくのがよいか一緒に考えます。

○ **文章題の構造を正しく把握させ、内容を正しくイメージさせます**

《文を短く区切り、イメージしやすくする》

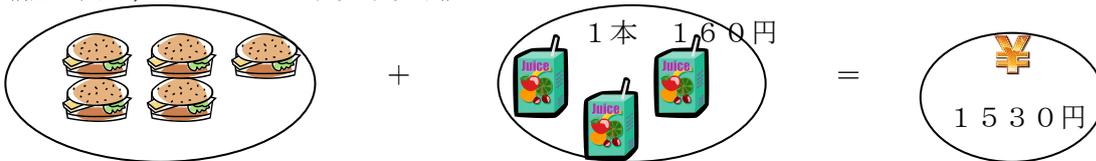
ハンバーガーを5個と1本160円のジュースを3本買ったなら、代金の合計が1530円になりました。ハンバーガー1個の値段を求めなさい。

⇒

ハンバーガーを5個買います。  
ジュースを3本買います。  
ジュースは1本160円です。  
代金の合計は1530円です。  
ハンバーガー1個の値段はいくらですか。

子どもと一緒に、一文を短く書き直してから取り組ませるとイメージしやすくなります。

《絵で表し、イメージしやすくする》



文章に沿って絵を描かせ、イメージを整理させる。

○ **四則に関係のある言葉の意味を理解させます**

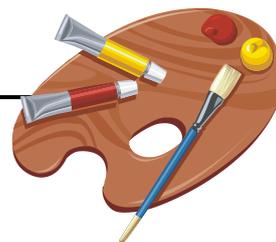
四則に関係のある言葉の意味を理解させ、「+・-・×・÷」から正しく選べるようにさせます。下のようなカードを作って渡しておき、文章からの演算記号を使うとよいか自分で選ばせるようにするとよいでしょう。



+	-	×	÷
加えた・合わせた 合計・全部で 増えた・もらった 全部で・まとめた いっしょにした	減った・のこった あげた・少ない 足りない・取った なくなった 食べた	～円のものを～個買った ～個ずつ～人に ～の倍になった	～個を～人で分ける ～個を～個ずつ分ける ～人の平均

## 学習に関すること⑦

### Q7. 創作・表現活動が苦手な子への指導の手だては？



#### つまずきの背景

- 指先を使うことが苦手
  - ・ 道具や楽器をうまく使うことができない。
- 視覚的な認知能力が低い
  - ・ 五線譜の空間の位置がわかりにくく、音符を読むことができない。
- 聴覚的な発達の問題
  - ・ 聴覚が敏感で、大きな音が苦手であり、人の演奏が聞けない。
  - ・ 音の高さや長さを聞き分けられなく、みんなと合わせたり、伴奏に合わせたりできない。
  - ・ 自分で思った声が出ているかどうかの調整機能が発達していない。
- 記憶することが苦手
  - ・ 何かを思い出して描こうとしても、思い出すことができないので描けない。
  - ・ 鍵盤やリコーダーの穴の位置やメロディー・リズムを覚えていられない。
- やるべき事や作業内容の優先順位が分からない
- 心因的な問題
  - ・ からかわれた経験や、自分の思ったような作品ができなかった経験から自信をなくしている。

#### 手だて

- **教具や補助具を工夫してみましょう**

手先が極端に不器用な子どものために、大きめで使いやすい道具や教材を用意し、学級のみんなが選択できるようにします。特別支援学校で使っている補助具などを参考にすることもよいでしょう。
- **指先の器用さを高めるために、手指を使う機会を増やし、指先の感覚を鍛えるようにしましょう**

各種粘土や砂、スライム、折り紙等で十分に遊ぶことで指先の感覚が磨かれることとなります。
- **読譜が苦手な場合は、音符と対応する鍵盤がわかるようにしましょう**

階名が書いてあるプリントをあらかじめ準備してあげましょう。また、楽譜と鍵盤に同じ色のシールを張らせてみましょう。楽譜が読めなくても、演奏できる充実感を与えることが大切です。
- **物の形がわからない場合は、その物の写真や型紙を準備しておきましょう**

型紙を組み合わせて、はり絵風にしたり、塗り絵で楽しませたりしましょう。パソコンのお絵かきソフトを使うと、きれいな線や形が描けます。
- **音の刺激が苦手な場合は、静寂を守る時間と、音量や音色を加減した演奏に取り組む時間とを明確に分けましょう**

比較的静かな活動場面では、安心して取り組める活動を用意しましょう。器楽のパート練習などにぎやかになる場面では、相談して場を変える、ヘッドホーンをする等工夫します。他の音と自分の音とを合わせる力を育てると、大事な音のみ選択的に聞き取れるようになり、周囲の音を不快に思わなくなる場合もあります。調整が難しい場合には聴覚だけに頼らず、ハンドサインなどを用いて運動感覚と聴覚を統合させていくこともよいでしょう。また、高さだけとか大きさだけ合わせるというように、調整のめあてをシンプルにして合わせると心地よい音になることを、聴覚的に体験できるような場面づくりも有効です。

○ **リズムを覚えるのが苦手な子には、楽しく活動できるよう工夫しましょう**

ボディーパーカッションやボイスパーカッションなどを取り入れると、子どもたちは楽しく覚えられるとともに、即時反応の訓練と模倣する力を養うことになります。

○ **楽器の演奏を敬遠する子には、パーカッションやベース部分の演奏を任せてみましょう**

メロディーの最初の音だけを演奏させるようにしたり、単純なベース部分を演奏させたりすることで、取り組みやすくなります。また、民族楽器などを用いると上手下手を気にしないで、楽しく演奏できます。

○ **声をだすことが苦手な子がいるときには、手話を交えた歌を扱ってみましょう**

みんなと一緒に演奏したという実感を持たせることで、歌への苦手意識をなくしていきましょう。

○ **説明が理解できない子どもには、目で見えて理解させるようにしましょう**

写真入りの手順表・絵カード・具体物を用意して見せながら説明することで、理解しやすくなります。作業そのものへの苦手意識が強い場合は、課題や作業の難度を下げたり、作業手順を見直し、部分的な仕上げを目標としたりすると取り組みやすくなります。また、共同制作にすることで、苦手なことを補い合うことができ、意欲的に取り組めるようになります。

○ **自己評価が低くやる気をなくしている子には、「やった」「できた」「頑張った」と思えるような体験がたくさんできるように周囲が支援してあげましょう**

教師が途中で手を貸しても最後は自分自身で完成させるようにすると、大きな自信につながります。たった5分でもかまいません。個別にかかわる時間をつくるようにしましょう。

○ **歌や楽器に苦手意識がある子には、簡単な興味のもてる曲から入り、達成感を与え、意欲を持たせていくことから始めましょう**

教科書の曲だけでなく、コマーシャルソングやアニメ・映画の曲など、日常、よく耳にする曲を使うのも効果的です。

## 授業の中で

○ **身体つながりや重なりを意識して、猫を絵に表現する授業**

- ・ 顔の丸の輪郭を先に描いてから部分を描き入れると、表情が画一的でつまらないものになってしまうがちです。そこで猫の顔を、鼻・口・目・輪郭・ひげの順に描いていくなど、描く順番を変えることにより豊かな表情を引き出すことができます。描く順番は、黒板に書いておくとよいでしょう。
- ・ 形をとらえるのが苦手な子どもには、練習として、猫の顔を描いたプリントを用意しておき、何回か上からなぞったり見ながら描いたりさせるのも効果的です。
- ・ 顔・体・尻尾・足のつながりを覚えてその順に描かせましょう。それぞれの型紙を用意して、それを紙の上に並べてそれをなぞらせるのも1つの方法です。
- ・ 足については、足首を先に餃子の形のように描いて、それを体とつなげれば簡単に表現できることを、2～3回、教師自身が描いて提示します。この方法には、いろいろな動きのある表現ができるメリットもあります。

○ **笛の授業**

- ・ 笛の音が出せない子には、後ろの親指と前の人差し指の2つの穴だけを押しえて、きれいな音を出す練習をするとよいでしょう。それ以上の穴を押しえようと、どこかの穴が押しえきれずに隙間があいてしまい、正しい音はでません。きれいな音の感覚を覚えさせることは大切です。

また、笛に上手に一定の息をいれることができない子には、ティッシュペーパーを1枚用意し、手で顔の前に持っていき、「フーッ」とスピードをつけて息を吐かせます。ティッシュペーパーが一定の息のスピードで勢いよくゆれるまで息をはく練習をさせます。その息で笛を吹かせてみてください。

- ・ タンギングについては、「トトロ」で練習してみてください。

「トトロのあとに口をつけて、トトロロとってみましょう。」「トの時と、ロの時で、舌はどこに当たりましたか。」「舌が上の歯の裏に当たる方がトで、もう少し奥のほうの上あごに当たる方がロですね。今日はトのほうのやり方で、練習しましょう。」

ほとんどの教科書にはタンギングは「トゥトゥ」と書いてありますが、唇にかなりの力が加わるために、鋭く固い感じの音色になってしまいます。「ト」の口形のほうが柔らかい音色が得られます。

#### ○ ボディーパーカッションの授業

- ・ CDを用意します。曲は、リズムカルでのりやすい曲、拍子がとりやすい曲、躍動的な曲なら、何でも構いません。
- ・ 最初は教師が曲に合わせて手拍子、頭・ひざ・おなか・胸・肩をたたき、人差し指で手のひらをつつく、指で指をたたくなど、腰掛けたまま、立ったままできるリズム表現をどんどんリードしていきます。
- ・ 最初は8呼間～16呼間などフレーズ毎の即時反応をさせ、ある程度見通しをもたせるように仕向けながらフレーズ感を養います。また、慣れてきたら全くランダムに動作を変えて即時反応を要求します。手拍子ははっきりした音が出ますが、おなかや腕などはガラリと音色が変わります。適当な間隔で手拍子を入れることで、音楽表現としての起伏ができ、一層集中を促すことができます。
- ・ 指と指をつき合わせてリズム表現をする場合、自然に気持ちは指先に集中しながらも、かすかな音しかしない、つまりP（ピアノ）PP（ピアニシモ）の表現法が自然に誘導されていることなるのです。単に力を抜いた弱さではなく、心いっぱいのためこんだ気持ちを、そっと静かに少しずつ表現することなのです。



## 学習に関すること⑧

### Q8. グループ活動が苦手な子への指導の手だては？



#### つまづきの背景

- 活動の内容（話し合いのテーマなど）が理解できない
- グループ活動の中での自分の役割がわからない
- 自分の世界に入ってしまう、友達とのかかわりをもとうとしない
- 自分の意見を通そうとして孤立してしまう（友達に合わせるができない）
- 緊張してしまい、自分の考えを表現することができない

#### 手だて

- **活動内容や活動の流れを具体的に明示し、見通しが持てるようにしましょう**  
スタート（始めにやること）とゴール（これで終わり）をはっきりさせることで、安心して活動に取り組むことができます。テーマのネーミングを工夫して子どもの興味を引きつけ、「やってみたい」という気持ちを起こさせることも大切です。
- **簡単にできる役割を決めて、やりがいをもたせるようにしましょう**
- **話し方のスキルを明示しておき、困ったときに活用できるようにしておきましょう**
- **個別でのかかりが必要な場合は、スモールステップで目標を設定するようにしましょう**

#### 授業の中で

- **「時間を計る」「〇〇を持つ」などのわかりやすい仕事を分担させましょう**
  - ・ きちんとできたら「ありがとう」「上手にできたね」と声をかけると、自信を持つことができ、次への意欲につながります。自分の意見を通しがちな子には、あえて司会をやらせることで中立の立場を守らせ、いろいろな見方や考え方があることに気付かせていくのも大切なことです。
- **スモールステップで目標を設定し、少しずつ集団に慣れさせるようにしましょう**
  - ・ 2人組の活動から人数を増やしていく、刺激の少ない固定的なメンバーから幅を広げていくなど「できたら誉める」の繰り返しで少しずつグループ活動に慣れさせていくことが大切です。
  - ・ これ以上グループで活動するのは無理と思われる場合は、本人なりの努力を周囲に認めさせた上で、別の課題を与えるようにすることも必要です。
- **安心して発言できる学級の雰囲気作りを心がけましょう**
  - ・ 「黙って聞く」「最後まで聞く」（笑ったりせかしたりしない）などを徹底させましょう。
  - ・ 教師が間に入って、言葉に詰まったり困ったりした時に援助できるようにしておきましょう。
- **温かい人間関係を育てるように心がけましょう**
  - ・ 「Q-Uテスト」の結果や教育相談を活用し、グループづくりに生かしていきましょう。
  - ・ 学級全体でのソーシャルスキルトレーニングをとおして、相手を尊重する気持ちを育てるとともに、グループ活動の意義やよさについて伝えていくようにしましょう。
  - ・ 簡単にできるゲームや集団での遊び（おにごっこ・かくれんぼなど）を取り入れ、友だちとのかかわり方を教えていきましょう。

## 学習に関すること⑨

### Q9. 授業中、離席をしてしまう子への指導の手だては？



#### つまづきの背景

- 注意集中が困難で、集中できる時間が短い
- 授業内容や課題がよく理解ができず、今、何をしたらよいかわからない
- 情緒的にいつも不安定で、自分の行動をコントロールする能力が十分に育っていない
- 集団での一斉授業が苦手で、周囲の空気が読めずにいる
- 内容に興味を全くもてずにいる
- 関心を引きたい、自分に関心を示して欲しいという気持ちがある

#### 手だて

##### ○ 着席している時間の目標を立てましょう

最初は5分でも10分でも、あまり無理なく着席していられると思われる時間を設定して約束しておきます。その約束が守れたらがんばりを認め、「がんばりカード」にシールを貼るなどして賞賛します。そうして本人と相談しながら少しずつ時間を延ばしていきます。ただ座らせるのではなく、着席時に、できる活動をきちんと準備しておくことも大切です。

##### ○ 集中できる時間を考えて課題をスモールステップにしましょう

1時間の授業をいくつかの区切り、それぞれの課題の内容と課題に取り組む時間を決めます。1時間の流れをカード等で示し、何をやるか、どこまでやれば終わりが目で見えてわかるようにしておくことも有効です。

##### ○ こまめにプラスの評価をしましょう

自己評価や自尊感情が低下していることが多いので、できたという達成感が味わえる体験をもたせることが大切です。ちょっとがんばればできそうなめあてや約束を決め、できたことを視覚に訴えかける方法で評価します。

##### ○ できるだけ刺激の少ない教室環境を整えましょう

掲示物や教材を整理し、必要な物を整然と提示したり置いたりするとともに、窓の外が気になってしまう子は座席の位置を窓際から離すなど、座席を工夫して、その子にとって刺激が少ないと思われる場所を見つけます。

##### ○ 気持ちを切り替えられる時間を作ってあげましょう

授業の中に座席を立ってよい活動、体を動かす活動や作業、声を出さず活動などをバランスよく取り入れ、授業にメリハリをつけます。

##### ○ 「ダメなものはダメ」と毅然とした態度で対処しましょう

自他の生命の安全に関わることや絶対にやってはいけないことについては、短い言葉で簡潔に注意し、やめさせます。

## 授業の中で

### ○ その子なりの目標や課題を工夫しましょう

- ・ 本人と相談して、「授業開始から〇分間」というように着席している時間の目標を立てます。初めはその子が無理なく座っていられる時間を設定し、守れたら賞賛することを繰り返しながら徐々に時間を延ばしていきます。
- ・ その子ができる課題を無理なくできる分量だけ与え、例えば「このプリントが終わるまでは座っている。」というような約束をし、守れたらすぐに賞賛します。
- ・ 約束が守れたら、その場ですぐほめてあげましょう。表を作って、シールを貼ってあげたりすると励みになります。

### ○ 席を立つ活動を取り入れましょう

- ・ 課題をスモールステップにし、ひとつの課題が終わったら次の課題に使うプリントを取りに行かせるなど、授業の流れの中に席を立つ活動を設定します。
- ・ 「プリントを配る。」「廊下の窓を開ける。」などの仕事を与え、こちらから席を立つ機会をもたせることによって気持ちを切り替えさせます。
- ・ どうしても落ち着かない場合は、「タイムアウト」を取らせ、その子の落ち着ける場所に行って気持ちの整理をさせます。教室内にその子の落ち着ける場所が作れば理想的です。その際は、「授業中に席を立つのは〇回まで」や「タイムアウトは〇分以内」などと約束を決めておきます。
- ・ 情緒的に不安定で別室へ行った方が落ち着くと判断される場合は、行かせることができる体制を整えておくことも必要です。それには全職員の共通理解を図り、他の職員の協力を得なければなりません。行き先や担当の教師、連絡方法などを決めておきましょう。カードを持たせ、「1日にレッドカード〇枚までならOK。」などと約束するのもよいでしょう。

### ○ 注意の仕方

- ・ 関心を引きたいために一人で歩き回っているときは無視します。
- ・ 他の子どもに迷惑をかける場合は、対応できる他の教師が行き、職員室や別室で個別に対応します。そして、その子と話し合いの場を持ち、「周りに迷惑をかけない。」「どうしても我慢できない時は、別室で授業を受ける。」など、最低限の約束を決めます。



## 学習に関すること⑩

### Q10. 授業中、私語が多い子への指導の手だては？



#### つまずきの背景

- 集中力がない
- 思いついたことをすぐに口にしてしまう
- 授業中は指名されたときに発言するといったルールや話の聞き方が理解できていない など

#### 手だて

- 集中できる授業の組み立てを工夫しましょう
- 発言していいときと悪いときのサインを決めておいたり、座席を担当の近くにしたりして、衝動をコントロールする手助けをしましょう
- 学級内でルールが徹底されていない可能性もあるので、全体でルールを再確認し、掲示しましょう

#### 授業の中で

##### ○ 空白の時間を作らない

まずは、授業の中で私語が出やすい空白の時間（めあてが不明確な時間）がないかどうかのチェックをしてみましょう。学習課題を明確に、そしてできるだけ細分化することで、授業に集中し、私語を減らすことができます。やることがはっきり分かり、さらに量も少なければ「これならできそうだ」という意欲にもつながります。その子だけでなく、学級全体にとっても有効です。

##### ○ 「今から○分間は、聞く時間です」

授業の中で、聞く時間を事前に提示することで、私語を慎む意識を持たせるとともに、時間が明示されていることで安心感が得られ、我慢ができる、という効果もあります。○分間黙って聞くことができたときには、大いに褒めてあげましょう。ただし、高学年になると皆の前で当たり前のことを褒められることが必ずしも嬉しいとは限らないので、言葉やタイミングに注意が必要です。「○分間静かに聞いてくれてありがとう。」などは、比較的、全学年を通して有効な言葉かけです。

##### ○ 先手を打つ

教師の方が先手を打って、しゃべろうとする瞬間に「今は、しゃべりません。」とかける一声は、その子だけでなく学級全体にも通用する注意です。おしゃべりが始まってしまうと途中ではなかなかやめにくいので、しゃべろうとする瞬間に一声かけることで、しゃべるタイミングを失い、さらに効果が上がるようです。

##### ○ 突発的なおしゃべり

その子の手をつないだり背中をさすったりして、気付かせるようにします。その際に気を付けることとして、その子の支援に当たる前に全体に指示を出すこと、あるいは、全体への指示を続けながら支援を行うことが大切です。その子への支援の度に全体の流れが止まってしまうと、周囲の子の、その子に対する評価を下げることにつながりかねないからです。

いつも制しているばかりでは、意欲の低下や教師との信頼関係を損なうことになってしまいます。休み時間などにゆっくりと話を聞いてあげたり、小さな前進を認めて褒めたりすることも大切です。

## 学習に関すること⑪

### Q11. 授業妨害をする子（奇声をあげたり、授業に関係のない言動をしたりして注目を集めたがる子）への指導の手だては？



#### つまずきの背景

- 学習の内容がわからない
- 衝動を抑えられない
- 自分を認めてほしい など

#### 手だて

- その子に合った学習支援を行いましょう
- 本人と相談をして、妨害にならない行為で衝動に対処する方法を考えましょう
- その行動では認めてもらえないことを示しましょう

#### 授業の中で

##### ○ 「わかりたい」のサイン

「わからない」をアピールする授業妨害は「わかりたい」気持ちの裏返しです。どの程度理解し、どこでつまずいているかを把握して、学習課題を明確にしたり、視覚的な教材を活用したりするなど、本人の実態に合った学習支援が必要です。一斉授業の中での工夫だけでは対応が困難な場合は、本人や保護者と相談して、別室で個別学習の時間を設け、スモールステップで学習を進める方法もあります。その際は、校内支援委員会を活用し、全職員の理解を得て、対応する場所や人を確保することも大切な準備です。

##### ○ 妨害行為の代わりに

衝動を抑えられず、どうしても我慢が出来なくなったときは、合図をして決まった場所に移動し、心を落ち着かせる等、事前に本人と話し合っておくと、安心して授業を受けることができます。

##### ○ 妨害行為は認めない

授業を妨害することで、結果的に注目を得る（先生が来る、みんなが見る）ことになったり、そうした行為を増長するような周りの雰囲気や反応があったりすると、問題行動はますます増えてしまいます。よくない行動には反応せず、正しい行動や今やるべき行動を「〇〇をします」と明確に伝えます。危険な行動の場合には、毅然とした態度で注意をすることも必要です。

また、本人への対処と同時に、周囲の子どもたちに対して、妨害行為に反応してはいけないという指導も必要です。しかし、そのことを直接話してしまうと本人からの信頼を失ってしまうし、周囲もその子を受け入れなくなってしまいます。そこで、まず全体に「〇〇をします」とか「〇〇に注目してください」といった明確な指示を出します。この指示には、妨害行為には反応しないというメッセージが込められています。気をとられて集中できない子へは個別に声をかけ、気持ちを授業に向けられるようにすることも大切です。これを繰り返し行い、妨害行為を増長するような雰囲気や反応のない環境を作っていきます。

上記のすべての場合において、本人の自己肯定感は低下しています。落ち着いているときにじっくり話し合う時間をとったり、その子のよさを認めたりして信頼関係を築くことや、活躍の場を作ったり、学級の中で認められていると感じられる居場所を確保したりすることも大切です。

## 学習に関すること⑫

### Q12. 学習に意欲が持てない子への指導の手だては？



#### つまづきの背景

- これまでの学習に遅れがあり、授業内容がよく理解できない
- 課題が理解できず、今、何をしたらよいかわからない
- 自己肯定感や自尊感情が低く、どうせできないとあきらめてしまっている
- こだわり行動が強かったり、注意集中が困難であったりするために、一斉授業の中での学習（活動）が苦手
- 寝不足、それに伴う朝食の問題など、生活習慣の影響
- 悩みや心配事など、心理面の影響

#### 手だて

- **課題を工夫しましょう**  
学習内容が理解できるための支援が不可欠です。「これならやれる」「これならやりたい」と思えるような課題を工夫します。
- **指示の出し方を工夫しましょう**  
「今、何をしたらいいのかがはっきり分かるように、その子にあった指示の出し方を工夫します。
- **自己肯定感や自尊感情を高めましょう**  
できたという達成感を味わわせる体験を数多くもたせます。
- **生活習慣の影響が考えられる場合は、家庭と連絡を取りながら改善を図りましょう**

#### 授業の中で

- **その子なりの目標や課題を工夫しましょう**
  - ・ 具体物や絵や写真などを使ったり、ゲーム的な要素を取り入れたりして、楽しく分かりやすい授業の導入を工夫します。
  - ・ 課題をスモールステップにし、初めはその子が集中可能な時間内に終わる分量の課題にして、達成感を味わわせ、様子を見ながら少しずつ増やします。
  - ・ プリントなどは1枚の問題数を少なくし、1枚終わってから次に進むようにします。
  - ・ いろいろなプリント（穴うめ、線がひいてある、項目が入っている、絵がある、ヒントがついている、など）を準備し、自分で選択して取り組むことができるようにします。
  - ・ 九九の表や電卓の使用などを認めます。
  - ・ 学習への取り組みが困難な場合は、保護者の理解を得た上で、その子が興味を持って取り組める内容の別な課題も用意します。

### ○ 指示の出し方を工夫しましょう

授業中、「今、何をしたらよいか、わからない」ために、学習に取り組む意欲がもてない子も多いようです。そこで、そんな子どもたちにも理解しやすい指示の方法を考える必要があります。

- ・ 近づいて目の前で話しかけます。
- ・ 「〇〇さん、お話をします。」などと呼びかけて注意を向けてから指示をします。
- ・ 指示は1つずつ。1つできてから次の指示をします。
- ・ 指示は短い言葉にし、復唱するなどして理解できたかどうか確認します。
- ・ 「指を一本立てたら、必ず先生を注目する。」「カード等を使い指示を出す。」など視覚に訴える工夫をします。

### ○ その子なりのがんばりを賞賛し、自己肯定感を高めましょう

- ・ たとえ課題が終わらなくても、取りかかれたことを認めてほめます。
- ・ 今日の授業の内容で、3つあったらそのうちの1つできればOKというように相談しておき、(ノートを写すだけ。1問だけやる。)それができたらほめます。
- ・ シール、花丸、到達カードなど、見える形でほめます。
- ・ すかさずその場でほめます。

### ○ できるだけ、声をかけてあげましょう

こまめに声かけを行い、やるべきことをさりげなく確認させることで、「今、自分が何をしたらいいのか、わからない」という状態をなくし、学習活動への不安感を取り除きます。ただ声をかけるだけでも、「今、自分は気にかけてられている」という満足感を与えられるため、精神的な安定を与えることができます。



## 学習に関すること⑬

### Q13. 集中して学習に取り組めない子への指導の手だては？



#### つまづきの背景

- 授業内容がよく理解できないため、「授業が面白くない」「学習への意欲が湧かない」ことが多い
- 周囲のみんなと一緒に活動をしたくても、上手にそれができない
- 情緒的な不安定さから、落ち着いて学習ができない

#### 手だて

- **わかりやすく、楽しい学習活動ができるようにします**  
学習への関心や意欲を高めるために、子どもたちに理解しやすい指示や説明の仕方を工夫し、授業の開始時等には、いつも同じペースで学習活動に入っていけるような手だてを考えます。また子どもが見通しを持って授業に臨めるように配慮し、課題はなるべく細分化します。板書の工夫をすることにより、ノートをとりやすくさせます。
- **集団の中での活動ができるようにします**  
周囲に合わせて同じように活動ができないため、すぐ注意力が散漫になったりイライラしたりしてしまう子どもたちがいます。一斉指導での学習への取り組み自体が困難な場合には、その子が興味を持って取り組める内容の別の課題を用意します。また、その子自身が得意なこと・関心の高いことについてみんなから評価され、認められる場を意識的に用意します。
- **情緒の安定を図ります**  
情緒的にいつも不安定になっているために、衝動的な行動が抑えられなかったり、周囲に合わせるができなかったりすることも多いようです。気持ちを落ち着かせることができるようにすることで、集中力を高めることができます。

#### 授業の中で

- **わかりやすく、楽しい学習活動ができるようにするための指導・支援**
  - ・ 授業中、「今、何をしたらよいか、わからない」ために不適切な行動をしてしまう子が多いようです。そこで、そんな子どもたちにも**理解しやすい指示の方法を考える**必要があります。  
例えば、近づいてから目の前で話しかけるようにします。また視覚的に訴えた方がわかりやすいので、「指を一本立てたら、必ず先生を注目することにし、それから指示や説明を伝える」「カード等を使い、指示を出す」などの方法も考えられます。一回の指示では、ひとつだけの事柄を知らせることにし（複数の指示は理解しにくく混乱しやすい）、それもなるべく短く、的確に話すよう心がけます。注意集中の苦手な子は、長い指示や説明をほとんど聞いていられません。指示を復唱するなどし、理解できたかどうかの確認も、必要に応じて行います。
  - ・ 授業の開始時には、**いつも同じペースで学習活動に入っていけるような手だて**が必要です。最初に、前回の授業内容についての小テストを行う・その日の授業に関連したクイズを出すなどして、パターン化を図ったり、学習指導にリズムをつけたりして、スムーズな導入ができるようにします

(いつも同じ順序で授業が進むと安心することができます)。「取りかかり」がうまく行くと、授業全体への参加の意欲も高まるようです。

- ・ **子どもが見通しをもてるようにする**ことも授業への不安を取り除く上で大切です。1時間の流れをカード等で示すようにします。1時間の授業の中を5～15分で区切り、それぞれの課題の内容と課題に取り組む時間を提示するといいでしょう(時間で区切る他に、量で区切ることもできます)。いつまでやったら、どこまでやったら終わりかが、はっきり分かるようにしておきます。授業中の約束等も分かり易い言葉でカードなどに書いておき、本人が見てすぐ確認できるような評価を工夫すると、子どもの励みになります。
- ・ **課題はなるべく細分化します(スモール・ステップ)**。「これならやれる」「これならやりたい」という課題の工夫をし、できそうなことから一つ一つ与えていって、できたところまでをその都度きちんと評価してから次に進みます。プリントなどは1枚の問題数を少なくし、1枚終わってから次に進むようにします(いくつかの課題を用意し、自分で選択して取り組むことができるようにしてもよい)。これは成就感や意欲をもたせるようにするためです。可能であれば、これだけはやってから休憩しようというルールなども少しずつ決めていくようにします。そうして集中できる時間が、徐々に長く持続できるようにしていきます。逆に、課題が終わったら〇〇をしてよい、というように、ごほうびの活動を相談して決めておくのもよいでしょう。
- ・ 書くことがあまり得意でないために、ノートをとることに抵抗を感じてしまい、結果的にそれが嫌で授業中、集中ができない子がいます(書字障害の場合もある)。このような場合は、**板書の工夫をすることにより、ノートを取りやすくさせる**ことができます。

例えば、重要な部分には囲みをしたり、アンダーラインを引いたり、色分けをしたりし、最低限そこだけノートにとればよい、ということにすると、「負担が軽くなるので書いてみよう」という意欲が出てきます。また板書をノートに写す時間を必ず設けることや、黒板を二等分して使って、半分が写し終わらなくても、もう半分を先生が書いている間、しばらく残っている状態にすることで、焦らず、安心してノートをとることができます。

ノートも半分に分けて使い、まず要点や重要語句などを左側に書くようにし、時間があれば、右側に他の部分を書くようにすることなどを指導します。

どうしても書くことに時間がかかる子の場合には、少々手間はかかりますが補助プリントを用意し、重要な部分の穴埋めだけすればよい、ということにする方法もあります。

## ○ 集団の中での活動ができるようになるための指導・支援

- ・ 一斉指導での学習への取り組み自体が困難な場合には、保護者の理解を得た上で、**その子が興味を持って取り組める別の内容の課題を用意**します。比較的学習に取り組んでいる教科や内容、時間等を観察すると、課題や支援のヒントが見つかる場合があります。
- ・ 日常の活動の中で、**自分の得意なこと・関心の高いことについて、みんなから評価され、認められる場**を意識的に作っていきます。電車の好きな子であれば、「修学旅行でどのように鉄道を使えば、効率的に名所を回るができるか」を調べさせ、発表させるのも一つです。周囲から「あの子は△△についてはスゴイ」と、見直されることで、集団の中での自己の存在感を持つことができるとともに、活動の喜びを味わうことができ、活動に参加することへの意欲や、自信をつけることができます。

## ○ 情緒の安定を図るための指導・支援

- ・ **座席位置に配慮**をします。注意集中の苦手な子を窓際の席にすると、外の様子が気になってしまい、さらに集中力がなくなり、不適切な行動を起こすもとになります。同様に一番後ろの席も、前の子どもたちの状況が目に入りやすくなるので注意が必要です。

注意集中が途切れるようなものは、なるべく座席のそばに置かないようにします。座席の側の掲

示物は、日課表や時間割表にして、予定やスケジュールがわかるようなものにするとういでしょう。子どもの作品はどうしてもいたずらしたくなったりするため、近くへの掲示は避けるなど、余計な刺激を少なくすることも大切です。

- ・ こまめに声かけを行い、**やるべきことをさりげなく確認させることで、「今、自分が、何をしたらよいかわからない」という状態をなくし、学習活動への不安感を取り除きます。**もしかすると、やることが自分だけ理解できていないという意識によって、疎外感を感じているのかもしれませんが、ただ声をかけるだけでも、「今、自分は気にかけている」という、満足感を与えられるため、精神的な安定を与えることができます。
- ・ みんなと同じにできないことを叱るのではなく、前述のように具体的に「今、何をしたらよいのか」を明確に伝えて、適切な行動ができるよう支援し、それがきちんとできるか見守るようにします。また「私語を控える」など、ひとつだけ約束をし（複数は難しく拒否されることも多くなる）、**短時間でもそれができたらほめて、約束を守ることへの意欲を高められるよう**にしていきます。  
どうしても集中ができず、私語や勝手な行動をしてしまう場合には、一旦**タイムアウト**（子どもと事前に話し合っておき、指導者の許可を得て安全で落ち着ける緊急避難場所へ移動する）をとらせるという方法も考えられます。その場を一時離れ、別室・廊下の片隅などで気持ちの整理をすること、具体的に「何がいけなかったのか」を考え、指導を受けることのできる時間を作ります。
- ・ 当然のことですが、行動が少しでも自分でコントロールできるようになってきたら、**小さな進歩や努力をほめ、自信や意欲をつけさせてほしい**と思います。「できたこと」をきちんと意識させ、認めてあげることが重要です。  
「うまく自分をコントロールできた時は、それがきちんと評価される」ということが、子どもにとっての励みになり、よりよい自分になろうという意欲につながります。また「できた」という経験により、自信や安心感を持つことができ、情緒の安定にもつながると思います。

## ○ その他として（心構え等）

- ・ 教師の心構えとしてですが、子どもとの信頼関係が築けないと、指導にもよい効果は得られません。このタイプの子どもたちは日ごろからほめられることが少なく、否定的にしか自分を捉えることができない子が多いようです。できたことや望ましい行動の場面を大切に、適切な言葉かけを行い、肯定的に自分を見ることができるよう指導するとともに、教師との信頼関係を深めていくことが必要です。  
教師が変われば、子どもも変わります。教師自身が子どもの良さを認めるとともに、苦手さに寄り添うことから始めてみましょう。それが子どもとの信頼関係に、そして子どもの成長につながります。また、すぐには改善されない場合も多いので、波があることを理解した上で、粘り強く継続指導を続けましょう。

## 学習に関すること⑭

### Q14. 授業中、指示に従えない子の指導の手だては？



#### つまづきの背景

- 指示内容の意味が理解できない
- こだわりが強く、一つのことにかかりきりになって次に進めない
- 他のことにすぐ気が向いてしまい、注意が集中・持続しない
- 情緒的に不安定で、自分の衝動的な行動を抑えられない
- 他の子と違うことをして注目を浴びたい

#### 手だて

##### ○ 集中しやすく、支援しやすい環境を整えましょう

座席は、授業に関係のない刺激（音・もの・景色・掲示・子どもの言動など）が少ない前の方（真ん中寄りで2列目あたり）にします。そうすれば、指示が聞き取りやすくなるばかりでなく、個別に声かけしたり、前の子のまねをさせたりするなどの支援がしやすくなります。

##### ○ わかり易い指示の伝え方を工夫しましょう

指示は子どもがわかることが大切です。ですから、子どもの実態に応じて指示内容を短くしたり、ゆっくり・はっきり伝えたりします。また、原則的に一つ活動ができてから次の指示を出すようにします。どうしてもいくつかある時は、番号や順番をつけ要点を板書したり、簡単なイラストや図を添えたりすると格段にわかりやすくなります。

##### ○ 話を聞くときの約束を決めましょう

先生が「今から大事な話をします」と言ったら、活動を停止し、よい姿勢で、先生に注目しながら聞くという約束を一緒に決めておきます。しかし、約束はいつも守れるとは限りません。そんな時は、約束とともに聞き逃したら「もう一度言ってください」、落ち着いて聞ける状態でない時は「～に行っていていいですか」とお願いするなど、対処の方法や手続きを決め、それらを含めてできた部分を賞賛していきます。

##### ○ プラスの評価や励ましのメッセージを伝えましょう

たとえプラスでなくとも、不適応な言動がない時がチャンスです。机間指導などの時にさりげなく触れて頑張りを賞賛したり、次も頑張るように励ましたりして、その子に気持ちに向いていることを示します。先生は自分を見ていてくれるという安心感が、確かな信頼関係を育てます。

#### 授業の中で

- ・ 大切な内容は、マークと要点の箇条書きで伝えます。



(大切なこと)

- 1 P 2 5～2 8 音読
- 2 段落に番号
- 3 新出漢字 5 回ずつ書く



(ここがポイント)

- < 30 ÷ 5 の計算 >  
★ 5 の段で計算する

- ・ 指示がわかり、活動できるために何ができるといいのか話し合っ、その中の1～2項目をめあてにし、守れたら○やシールを付けて意欲を高めていきます。

例えば、が出たら『活動をやめる』がめあてにすると右のようになります。

活動をやめる	1・2 校時	3・4 校時	5・6 校時	合計	ごほうびシール
9/12	○	△	◎	3	

## 学習に関すること⑮

### Q15. 授業の中で、つまずきのある子どもに支援をする際の、周囲の子どもたちへの配慮点は？



#### つまずきの背景

- つまずきのある子どものマイナス面にばかりが注目される
- つまずきのある子への適切なかかわり方がわからない

#### 手だて

##### ○ つまずきのある子の長所や得意なところに目を向けましょう

どうしても、欠点や苦手なところばかりがクローズアップされてしまうために、周囲の子どもたちからの評価が低くなり、本人に対する不適切な対応や態度につながってしまうこともあります。一定の価値のみにこだわることなく、その子の長所や得意なこと・関心の高いものについて周囲に理解されるよう、教師自身がその子の良さを認めるとともに、発揮できる場面を設定するとよいでしょう。

また、つまずきのある子どもへの適切なかかわり方を教師自身がモデルとなって示すことで、周囲の子どもたちも適切な対応や態度がとれるようになってきます。

##### ○ 誰にでも優しくできる、温かな心を育む学級経営を心がけましょう

周囲の子どもたちの不適切な対応や態度は、不満な気持ちの現れです。周囲の子どもたちの話をじっくり聞くなど向き合う時間も大切に、その子たちの良さも認め、居がいのある学級経営を心掛けましょう。

#### 授業の中で

##### ○ 授業（教科）での配慮

- ・ つまずきを予測して、いろいろな種類のプリントを準備しておきます（穴埋め・ヒントがついている・線が入っている等）。
- ・ 課題をいくつか用意しておき（誰もが行う課題とその他選択課題をいくつか）、つまずきのある子だけでなく、誰もが選べるようにします（全体に対して準備、配慮）。

##### ○ 学級経営上の配慮

- ・ 私たちの身の回りには、いろいろな人がいるということを、周囲の子どもたちに知ってもらいます。そして、上手にできないことなどがあるとき、互いに支え合わなければならないことは当たり前であり、その手助けをするため「特に配慮が必要となる場合もある」ということも、理解してもらいます。

ただ、違いはわずかなものであって、人として変わらない仲間であり友だちであるということは、きちんと付け加えておきます。

- ・ どうしても欠点ばかりに目が向きがちですが、長所にも目が向けられるようにします。それによって、「あ、こんないいところもあるのだ」と気づかせ、その子を同じ仲間として受け入れられるようにします。よいところを認識させることで、「乱暴な子」「気まぐれな子」「空気の読めない子」といったレッテルを取り除くことができ、周囲との関係を修復させることができます。

そのためには教師が常に長所を見つける努力をし、伸ばしてやることも大切です。

- ・ その子に対応する際、気をつけてもらうことについても、最低限は知らせておきます（ケースによっては本人がいない場面で行うことになります）。

例えば何かトラブルがあったときなどに、周囲はその子に対し、「それはダメ」「やってはいけない」等の否定的な言葉を使いがちですが、それだけではうまく状況の理解ができず、かえってその子の感情を高ぶらせてしまうことが多いので、「具体的に何を、どうしたらいいのか」を、丁寧に教えること（言語化）なども、周囲の子どもたちには伝えておくことが大切です。

## < 指導例： 学級活動等で、子どもたちに適切な他者理解を図らせるときなどに >

指導者から周囲の子どもたちに話をします（ケースによってですが、つまずきを見せている子本人が個別指導等を受けていて、教室にいない時などの方がよいでしょう）。

まず、「私たちの生きている世界の中には、様々な人がいます。」と、話を始めます

「人は、各々体つき・顔つきが違っていたり、性格・個性が違っていたり、得意なこと・苦手なことが違っていたり、好きなもの・興味関心のあるものや趣味が違っていたり、その他、違っていることがたくさんあります。」

「そんな中で、通常多くの方は、100メートルを思い切り走り抜くことができますが、身体の違いなどによっては、ごくゆっくりしか走れない人もいます。」

「でも、その時、はっきりと身体のケガなどとわかっている場合には、みんなも無理に走らせたりは、しないよね。」

子どもたちの反応をみます。おそらく大半は頷いていることでしょう。

「けれど、外からわからないものの場合もあります。見た目には全く健康そうに見えるけど、うまく速く走れないこともあるわけです。」

「そんな時には、それを周囲の人が理解し、手助けをしたり、支えてあげたりする必要があります。」

「それと同様に、みんなと同じように行動したり、考えたり、生活をしたりしたくても、それがうまくできない人もいます。」

「だとすれば、上手にできないことなどがある時、互いに支え合わなければならないのは当たり前ですよ。」

多くの子どもたちは同意してくれると思います。そこで、

「じゃ、思いつくだけでいいから、どんな場合があつて、そんな時にどうしたらいいのか、考えてみよう。」

「先生としては、こんなふうにしたらいんじゃないのかと、思うんだけど。」

と、子どもたち自身が考え、話し合う場を作り、必要な配慮点や支援の方法を子どもたちに伝えます。

子どもたちに知ってもらい、考えてもらうことで、うまくできない人の手助けをするために、「特に配慮が必要となる場合もある」「きちんとその子を理解し、手助けしたり、支えあったりしなければならない」ということが、理解されると思います。

もちろん、その時も、違いはほんのちょっとしたもので、みんなと変わらない仲間であり、友だちであるということは、きちんと付け加えます。

## 生活に関すること①

### Q16. 整理整頓や持ち物の準備等が苦手な子どもへの支援の手だては？



#### つまづきの背景

##### 《整理整頓ができない》

- 片付け方や整理の仕方がわからない
- 指示をうまく理解できない
- 注意散漫で集中できない
- 手先が不器用でうまくできない
- 記憶力が弱く、片付ける場所を覚えることができない

##### 《持ち物の準備ができない》

- 家庭環境の要因（家庭が不安定、基本的な生活習慣が整っていないなど）
- 子ども自身の要因（無気力、無自覚、混乱、無責任など）

#### 手だて

##### 整理整頓ができない子

##### ○ 片付けや整理の仕方の型を決めておきましょう

何をどこに片付けたらよいかわからないために、散らかった状態になってしまうことがあります。1年生では全員に、机の中やロッカーの中に何を置き、道具箱や算数セットでは用具の入れ方なども指導します。これと同様に、支援の必要な子には、はじめに「何を」「どこに」「どのように」片付けるかの型を決めておきます。ロッカーや道具箱の内側にきちんと入っている状態の写真を貼っておき、どこに何が入るか明確にしておくと同様で間違いなくすみません。まず教師が先にやって見せ、その後まねをさせます。あせるような言葉かけはしないように心掛け、できたらほめて、カードにシールを貼るなどして意欲を引き出すようにします。どうしても散らかる場合は、とりあえず入れておく「〇〇さん箱」を作り、まずそこに入れることの声かけをして一応は片付けさせましょう。そして、後で練習をします。

##### ○ 片付けの約束も決めておきましょう

片付けをするうえで大切なポイントを約束として決めておき、片付けの際に意識させていくことで習慣化を図ることが大切です。

《約束の例》 ①後回しにしない。  
②使ったらすぐにもどす。  
③使うものだけ机の上に出す。など

##### ○ 注意散漫で集中できない子への対応

集中できない子は、聞く力が不十分のため教師の指示通りに片付けられないことがあります。また、注意散漫な子は片付けるべきときに、他のことに注意がそがれてしまい、前の時間の用具を出したままになってしまうことがあります。そのような場合は、「〇〇さんにお話ししますよ。」などと声かけして意識付けをするとともに、片付ける物を見せて、しまう場所を指し示します。なるべく不要なものはこまめにしまうよう授業の要所で声かけを行うとともに、しまうのを見届けできたらほめます。

今、必要な物と不要な物との区別がつかず、どうしても机の上に物が散乱し、周囲に落し物が多くなる子には、「〇〇さん箱」にすべて入れさせるようにします。自分の持ち物をきちんと認識する力が

弱い子には、**必ず記名**させ、よく見させて区別ができるようにします。**落とし物は教師が手渡し、自分の物かどうか確認**させ、自分で箱に入れながら**用具や品物の自己管理を意識**づけていけるようにしましょう。注意散漫な子は、計画的に行動する力や見通しをもつ力が弱く、次にどうすべきかを考えにくい傾向もあるので、**一日の予定の確認**をしたり、**メモなどで表示**をしたりすることが行動の助けとなります。

#### ○ 手先が不器用でうまくできない子への対応

指先の細かい運動が苦手な子は、やり方が理解できていてもうまくいきません。時間もかかるのでイライラしたり、片付けを拒否したりすることも多くあります。また、周囲が手伝ってしまうことで技術が身につかず、自信をなくしていることもあります。そこで**部分的なことから練習してできた喜びを感じさせながら支援**していくことが望ましいと考えられます。

##### \*【紙を折る】

学校は配布物が多いので、紙を折る動作は大切です。二つ折り、四つ折りを言葉とともに丁寧に教えていきます。折り紙を利用して興味を引き、楽しんで折っているうちにかなり高度な折り紙もできるようになり、集中力もついていくはずです。

##### \*【衣服の始末】

衣服が裏脱ぎにならないようにしてから、たたんで机の上に置きます。体育着をたたんで体育袋に入れることを習慣化する場合、袋を大きくする配慮が必要です。指導初期に衣服の始末ができず散乱する場合は、箱を用意してその中に入れさせるとよいでしょう。

##### \*【のりとはさみ】

とても難しい動作です。貼る面に対してのりの量をうまく加減できないことがあります。チューブより容器に入っているものや、テープ形式のものの方が扱いやすいと思います。はさみも線の通りに切れないので、いろいろな線を切る遊びを取り入れて自信をもって使えるように練習させることが大切です。

#### ○ 記憶力が弱く片付ける場所を忘れてしまう子への対応

さまざまな品物を自己管理しながら上手に片付けたりしまったりするためには、「今、何を、どこに、どのようにしたらよいか」を忘れずに覚えておくことが必要です。しかし、そのときは覚えていても時間がたつと忘れてしまうことがあります。たまになら問題ありませんが、たびたび重なると自信をなくしていきます。そのような子には、**目に付くところにメモを貼っておく**とか、**友だちや教師の力を借りる**など、いろいろな方法を教えておき、自分に合った方法を見つけたり、使ったりさせるようにします。

### 持ち物の準備ができない子

#### ○ 家庭と協力して対応しましょう

小学校、特に低学年の忘れ物は、家庭環境の要因が大きい場合があります。家庭が不安定であったり、基本的な生活習慣が整っていなかったりしている場合が見受けられます。一方、忘れ物は少ないが何を持ってきているのかを自分で把握していない子どももいます。こちらの子は、親がすべて整えているため、高学年になるにつれて忘れ物が多くなる傾向があります。いずれにしても、忘れ物は自立の基礎としての「しつけ」が及ばないことで生じます。**家庭と協力して早い段階で対応**していくことが大切です。忘れ物がたび重なってきたら、忘れ物を窓口として保護者とともに生活態度について見直してもらい、問題が大き過ぎる場合は、子どもの負担を軽減するような工夫が必要になってきます。

#### ○ 忘れ物をなくすよう真剣に考えさせよう

忘れ物を繰り返す要因の一つに、子ども自身の無気力や混乱があります。忘れ物をして「困った」という自覚が薄い子には、子ども自身にその実感をさせることです。親が忘れ物をわざわざ届けにき

たり、教師や友だちが代用品を用意したりして、案外子どもは「困らない」か「なんとかなってしまう」という誤学習をしているかもしれません。子ども自身が「困った」と思う場面をじっくり待ったり、周りの友だちも困っていることを伝えたりして、真剣に考えさせましょう。

### ○ 自分の責任で解決させよう

次に、「**忘れ物は自分の責任であり、自分の責任で解決する**」ということ子ども自身に自覚させるようにします。例えば、学習用具を忘れた子が「先生、〇〇を忘れました。」と言ったら「そう、忘れてしまったの。それは困るね。じゃあ、どうすればいいと思う？」と聞き返し、本人に失敗の解決方法を考えさせるようにします。そして、自分なりの解決方法が提示できたら、教師はその方法を支援します。解決方法が出せない子には、「〇〇するといいよね。」と助言し、これを何回か繰り返すことで「〇〇を忘れたので、△△のようにします。」と言えるようになってきます。このことで2つの効果が期待できます。1つ目は、忘れたことを教師にありのままに言いやすくなり、教師と子どもの関係が悪くならず、また、忘れたことを責めなくて済みます。2つ目は、忘れ物に限らず、その他の失敗場面でも解決策を自ら考えるようになります。

### ○ 忘れ物をした原因を考えさせよう

忘れ物をしやすい子は、聞いただけでは覚えられないのにメモもとっていないとか、メモを取っても見ることを忘れてしまうとか、必要なものをどこに置いたかわからなくなってしまっているなどいくつかの原因が関係していると考えられます。**忘れ物をした時に何が原因だったのか本人に考えさせ、具体的な解決策を立てさせる**ようにしましょう。そして、教師や保護者が忍耐強くつきあいながら、子どもが自らの行動を変えていけるよう支援することが大切です。

#### 《具体的な解決策の例》

- ・ 持っていくものは必ずメモを取るようにする。
- ・ 出かける前に必ずメモを見るよう習慣付ける。
- ・ メモを貼る場所を決めておく。  
(家の人にもそれを見て声をかけやすい。)
- ・ セットなど必要な物はまとめて袋に入れる。
- ・ 物の置き場所は決まったところに必ず表示をしておく。
- ・ 絶対に必要な物は、玄関の目立つところに置く。
- ・ 忘れたらどうすればよいか、考えたり教えたりしておく。  
(兄弟姉妹や友だちに借りに行く方法や学習用具など)

## 学級経営の中で

整理整頓が苦手な子や忘れ物が多くて困ってしまう子は、どの学級にも多かれ少なかれ必ずいます。また、発達段階として小さいときほど多くいるものです。子どもにとってこの問題は、立派な発達課題のひとつであると思います。ただ問題は、いつになっても課題解決をしようとならない子、またはできない子に対して有効な手だてがなかなか見つからない点にあります。

人とかかわりが苦手な子が多いので、物とかかわりは見落としがちになりますが、整理整頓や持ち物の準備は学校で学ぶ基本的な生活習慣の一つです。物との付き合いがうまくできる、上手だということは効率よくものごとを処理する力があるということで、読み書き計算と同様の基礎能力です。整理整頓や持ち物の準備は生きるための基礎として、焦らずじっくり取り組み、学級全体で持ち物の整理などを定期的に設けたり、ときどき成功体験を話し合ったり改善策を考えさせたりしながら意識を高め根気よく教えていくことが必要です。

## 生活に関すること②

### Q17. 集団生活の中でみんなのペースについていけない子どもへの支援の手だては？



#### つまづきの背景

- 好きなことに熱中して時間や周りのことを気にしない
- 一斉の指示が入りにくい
- すべきことの優先順位がわからない
- 不器用だったり、周りのペースが速すぎたりしてついていけない

みんなのペースについていけない子といっても、ほとんどの場面で行動が遅い子、学習や作業の準備が遅い子、取りかかりの遅い子、特定の場面（給食時の「食べる」行為など）で行動が遅い子など様々です。その子どもの性格に加えて、生育歴の中での環境的要因も大きく作用しています。

#### 手だて

- **好きなことを続け、行動を切り替えようとしない場合、切り替える必然性を高める工夫をサポートとして行いましょう**
- **一斉の指示がとおる支援を行いましょう**
- **行動の優先順位がわかるような支援を行いましょう**  
経験をもとに見通しを立てて行動することは得意でないのかもしれませんが。
- **身体機能の面からのサポートを考えましょう**  
手先が不器用であったり微細運動が苦手であったりすることから時間がかかってしまうのかもしれないという見方も大切です。

#### 学級経営の中で

- **朝や帰りの会での連絡事項**
  - ・ 視覚に訴える工夫をしてみましょう。たとえば、ポータブルのホワイトボードに連絡事項を書き、優先順位を色分けするなどして、前黒板付近に毎日掲示するのも効果的です。
- **教師の話し方**
  - ・ アイコンタクトを意識して話しかける姿勢を持つこと、指示内容は短く・はっきり・ゆっくり伝えることなどを常に心がけることで、聞き取りやすい環境づくりができます。
- **好きなことを続け、行動を切り替えようとしない場合**
  - ・ これが終わったらとか、ここまでできたらと量で明確に終わりを示しましょう。活動の終わりを明確に示すと気持ちの整理がつきやすくなります。また、次の活動を明確に伝えることで見通しを持つことができます。  
(例)「このページのピカチュウが上手に染め終わったら終わりにしようね。」  
(例)「あと5ページ読んだら、このプリントに名前を書いて始めるよ。」

- ・ 子ども自身に終わりを決めさせてみましょう。自己コントロールが苦手な子には、自分で選択する、自分で目標を決めて守るという経験は大切です。

(例)「11時になったら集会があるから、何時になったら粘土やめる？」  
その時刻をカードに書いて机の上に貼ってあげると、さらに効果的です。

#### ○ 一斉の指示が通る支援として

- ・ 自分への指示であることがわかるように声をかけ、注意が向けられるようにしましょう。
- ・ 自分にも関係していることを意識できるように、そばに寄って話したり、視線を合わせたりして話すようにしましょう。
- ・ 大切なことは絵や文字などで表し、視覚に訴えるのも効果的です。

#### ○ 指示を忘れないようにする

- ・ 指示代名詞はできるだけ使わずに、指示の言葉は短く・はっきり・ゆっくりと伝えましょう。
- ・ 1回の指示は1つだけにし、その行動ができてから次の指示を出すようにしましょう。
- ・ 該当の子どもだけでなく、クラス全体や他の子どもに指示した内容を復唱させるのも効果的です。

#### ○ 視覚からの刺激による手立て

- ・ やるべきことの箇条書きメモや絵・図・写真などがあると、みんなより行動が遅れても手順を確認しながら取り組むことができます。
- ・ 毎日繰り返すことについては、定着するまでの間、手順を示したカードを見えるところに置くなどの工夫をしてみましょう。(根気強い支援が大切です。)

#### ○ その子の行動をよく観察をすることが大切

- ・ ある動作がうまくいかず失敗を繰り返して時間がかかっていたり、やる気をなくしていたりする場合は、つまずきの原因を早く見つけ出して、アドバイスや改善の方法を提案できれば本人も安心し、よい方向に向かうはずです。
- ・ 手先の不器用さ等から作業でつまずく場合は、大きめで使いやすい道具や教材も準備し、児童生徒が選択できるようにしてみましょう。

#### ○ 最終的には本人が自分の問題として考え、その対処方法を身に付けられるようにすることが大切

- ・ 途中でやる気をなくしたりあきらめたりすることも十分考えられるので、こまめに声をかけ、どれぐらいできるようになったか確かめたり励ましたりしながら、段階的に対応することも必要です。



## 生活に関すること③

### Q18. 友だちへの暴言や暴力が見られる子どもへの手だては？



#### つまずきの背景

#### ○ 欲求不満耐性がきわめて低い

思い通りにならないときでも、子どもたちはその理由を理解して仕方なく我慢するか、または我慢できなくても泣いたりすねたりする程度でおさまります。しかし、ちょっとしたことで思い通りにならないと、周りの友だちを責めたり暴力を振るったりしてしまう子がいます。このような行動を繰り返す子は、欲求不満耐性がきわめて低いと考えられます。そして、ストレスのもととなる何かを引き金にして、感情だけが暴走し自己コントロールの不全な状態に陥ってしまうことが多くあります。

#### ○ 適切な関わり方やことばのかけ方が分からない

自分の気持ちをうまく表現できなかつたり、相手にどのようなことばかけをしたらいいのかわからなかつたりして、乱暴な言動がつい出てしまうという場合があります。適切な指導がされないと、同じような失敗を繰り返すことになり、二次障害に陥ってしまうことも多くみられます。

#### 手だて

#### ○ 安全の確保と安心感の回復を優先しましょう

##### ・その子の感情を受け入れる

自己コントロール不全に陥った場合、かなり乱暴な言葉を吐いて相手に向かって行くだけでなく、物を投げる・蹴る・壊すなど攻撃的な行動も見られます。何よりも、本人及び周りの子への安全の確保と安心感の回復が大切ですが、その際、教師は「今この子に起こっていることは、異常な状態での正常な反応なのだ。」と認識して、あわてず冷静に対処することも大切です。

##### ・その子の特性に応じた対応の仕方を整理しておく

日々の生活の中でちょっとした言葉かけの反応や、友だちとのやりとり中でその子のキレる状態を的確につかんでおき、どのような言葉かけなら興奮状態から一步落ち着けるようになるのか、どういう対応をすれば共感的に理解してもらえるのかななどを、整理しておくことが大切です。

##### ・教師間の連携体制や連絡方法をつくっておく

キレて興奮状態であるときは、言葉かけをする余裕もなく、差し迫った危険な行為に到ることも考えられます。暴れ回って手当たり次第投げたり倒したり、危険なものを振り回したりしてきたら、状況に応じてですが、力づくでも制止するか、場合によっては周りの子どもたちを避難させて興奮を抑えるしかありません。

勿論、こういう場合はすぐに応援の先生に来てもらうことが大切です。日ごろから、いざというときに迅速に対応できるよう、連携体制を確認しておきましょう。応援の先生が来たら、少し落ち着ける場所に移動させ、本人及び周りの子たちの安定をはかります。

#### ○ 未然に対応しましょう

##### ・先手を打って言葉をかけ未然に対応できるようにする

一度興奮状態になってしまうと長時間にわたって冷静さを失い、心が不安定のまま過ごすことになってしまう場合もあり、本人にとっても不利益です。なるべく先手を打って未然に対応することがとても大切です。キレるときそうでないときの本人の行動パターンをよく観察しておき、キレそ

うなときには「大きく深呼吸してごらん。それでもだめなら、外に出て大声を出してきてごらん。」というように、対処方法を具体的に伝えてあげましょう。一人になれる場所でクールダウンしてくる、顔を洗ったり水を飲んだりして気分を変えるなども有効な方法です。

#### ・周囲の子どもたちに対応方法を伝えておく

比較的安定した生活をしているときには、余計な刺激を与えないように周りの子に伝えておくことも大切です。キレやすい子は、ときとしていじめやからかいの対象になることがあります。反応がおもしろい、授業が潰れて勉強しなくてよいという思いからのからかいなどは言語道断ですが、言い争いやちょっとした誤解から興奮状態に入ってしまう場合もあるので、本人を刺激するような言動は控えるようにするとともに、興奮してしまった時は子どもに任せず、早めに教師が対応するようにしましょう。

#### ○ 気持ちや思いを言葉で表現させましょう

乱暴な言動が目立つ子やキレやすい子は、自分の気持ちや思いをうまく表現できず、友だちにかかわれたり自信をなくしたりしていることが多く、学習面でのつまずきなども重なると、さらに自己評価を低くしてしまいます。自分に自信が持てず自己評価の低い子は、小さな失敗も大きく感じたり、何か些細なことを言われても、自分自身をすべて否定されたように受け止めてしまったりして、自己防衛的に乱暴な言葉や態度で強く出てしまうことが多くあります。自分の気持ちや思いを発散できる場や、きちんと伝えられるよう表現の仕方を教えてくれる場など、その子に合った自信の回復の場が必要です。言葉で気持ちを表現できるように援助していくとともに、学習面でのつまずきに対しては個別に指導することも必要です。

#### ○ 保護者への支援と情緒的サポートを心がけましょう

キレる頻度と程度にもよりますが、子どもへの情緒的サポート機能を果たしてもらえるよう、保護者を支援することが必要なケースがあります。キレやすい子の背景を考えると、虐待を受けてトラウマを持つ子と同じような特徴を持っている場合が多くあります。例えば「おまえなんか産まなければよかった。」と親から聞かされ続ける言葉の暴力（心理的虐待）は、力による暴力以上に子どもの心に深い傷を与えます。しつけという美名のもとに加えられた暴力は、成長しつつある子どもの心に、人に対する深い憎しみと不信感を与えるものです。今はなくなっているもある出来事（例えば「思い通りに行かない」）が「怒りや恐怖、深い悲しみ」といった過去の心的外傷体験を呼び起こし（フラッシュバック）、他人に対し非常に攻撃的になったり、些細なことに過剰反応したりしてしまいます。このような反応と同じような特徴を持つキレる子どもは、幼いときから不快な感情を丸ごと受け止めてもらった体験が少ないと考えられます。そのため、自分の感情にどう対処してよいかわからず、時として暴走します。このような子どもの心の状態を母親に理解してもらい、情緒的サポートを依頼するのです。肯定的な関わりの中であたたかな感情交流を図り、新しい親子関係や信頼関係の再構築をする中で自分の感情にも正面から向き合い、自己コントロールの力を高められることを期待したいものです。



### ○ その子との信頼関係が築けるよういろいろなかわりを大切にする

キレやすい子への対応と同時に大切なことは、普段の学級経営の中で予防的措置を講じることです。「キレる子は、自分の感情を上手に表現できない。その力をつける機会のないまま育ってきているのだ。」と理解すると対処の仕方が見えてきます。学級で**アサーショントレーニング**や**ソーシャルスキル学習**を通した**コミュニケーション能力の育成**を行ったり、**構成的グループエンカウンター**を活用した**ふれあい体験**で、**感情を語る体験**をさせたりします。すぐには気持ちや思いをうまく表現できなくても、友だちの気持ちや感じ方を理解しながら、自分の気持ちに合う言葉や言い方を身につけていくことができるはずです。また、学級の中で自分の役割や仕事がよくわかるもの（係など）にきちんと位置づけられ、友だちから認められる機会ができるように配慮しておくことも大切なポイントとなります。そのためには、まず先生がその子の学級での居場所を作っていくことが大切です。本人の対処の力や周りの受け入れる力がアップしてくれば、学級での安心できる居場所ができてくるはずです。



## 生活に関すること④

### Q19. 友だちにかかわれない、集団活動に取り組めない子どもへの手だては？

#### つまづきの背景

- その場の状況が把握できず、どうしたらいいかわからない
- 集団に入りたいが声のかけ方や入り方がわからない
- 自分の興味や関心が優先し、人とかかわりに興味が持てない
- 友だちとうまくやっていく自信がなくて集団の中に入れない
- 大人への依存が強く、友だちとかかわりを求めようとしない
- 集団の中での緊張に疲れ、一人の時間を必要としている



#### 手だて

##### ○ 成功体験を増やし、自信をつけさせましょう

簡単にできる役割を持たせることで「よさ」を誉める機会を増やし、「がんばればできる」という自己イメージを高めさせていきましょう。どんな活動を何のためにやるのかを事前に知らせたり、活動の内容や方法・順序などをカード化して具体的に明示したりして、混乱せずに取り組める工夫をすると効果的です。

##### ○ 意図的に集団と交わる場を設定し、友だちとかかわる経験を増やしましょう

友だちへの声のかけ方を個別にトレーニングする機会をつくったり、実際に起こりそうな場を設定してロールプレイを取り入れたりして、少しずつ実践へと結びつけていきましょう。家庭にも協力を依頼して友だちと過ごす時間を確保してもらい、「友だちの良さ」に気付かせることも大切です。また、一人の時間を必要としている場合は、無理をさせずに安心して過ごせる場所を確保してあげるようにしますが、時間などの約束をすることにより、集団に戻るものの必要性も少しずつ身に付けさせていき、「みんなといっしょに活動する」ことの大切さや楽しさを味わわせていきましょう。

#### 学級経営の中で

##### ○ 子どもたち一人一人が個として認められ、安心して生活できる学級づくりを心がけましょう

- ・ 係や当番活動などで見られる些細なこと(まじめさ・丁寧さなど)に目を向け、「こんないいところがあるよ。」と全体に知らせて自信をつけさせましょう。
- ・ 「だめだよ。」「やめてよ。」などの否定的な言葉よりも、「こうするといいよ。」「こうしてごらん。」などの温かみのある言葉かけを徹底させ、居心地のよい集団を作るようにしましょう。

##### ○ 教師が間に入って「きっかけづくり」をするようにしましょう

- ・ 「何をしているのですか。」「ぼくも入れてください。」などの声かけをさせたあと、慣れるまでそばにいたり、ときどき声をかけたりして見守るようにしましょう。
- ・ 学級活動などで「おにごっこ」のようなルールの簡単なゲームをしたり、授業の中で「2人組」や「グループ活動」を取り入れたりして、集団とかかわる機会を増やしていきましょう。
- ・ 話しかけやすい子をとりの座席にしたり、「〇〇さんに聞いてごらん。」「〇〇さんが待っているよ。」とレールを敷いたりするとともに、「〇〇さん、よろしくね。」「〇〇さん、いつもありがとう。」と周囲の児童のサポートを促すことも効果的です。

## 生活に関すること⑤

### Q20. 周囲の子どもたちに障がいのある子どもを受容させるための手だては？



#### つまずきの背景

- 特別扱いに対して、疑問やうらやましさがある
- 自分も教師に注目して欲しいと思っている
- 「あの子のせいで、こんなに我慢しなければならない」という被害意識がある

#### 手だて

##### ○ 対象児童生徒への理解を深めましょう

他の子どもたちにとっては、対象児童生徒に対する教師の日々の言動が、何よりのモデルになります。ですから、「よさ」や「得意なこと」「頑張り」を具体的に伝えたり、「何したかった?」「どうしたらいいかな」「いっしょにやってみようか」等と、その子に寄り添った対応を示したりして、自然な中で理解を図っていきます。

##### ○ 個性を認め合えるようにしましょう

子どもたちとの日ごろのかかわりの中で、また学級活動や道徳の時間を活用して、世の中にはだれ一人として同じ人間は存在しないこと、得意不得意はだれにでもあること、どの子も何かしら困ったりつまずいたりしていること…等々、違いを認めると同時に、違うからこそいいという意識が持てるようにします。楽しい雰囲気の中でこれらの意識を培うことができる、構成的グループエンカウンターやソーシャルスキルトレーニング（SST）なども有効な活動です。

##### ○ クラスの誰もが認められていると思える対応を工夫しましょう

子どもたちは、先生が自分にしてくれたことが大きな励みになります。ですから、日ごろからちょっとしたときに個別に声かけしたり、ノートや連絡帳にちょっとコメントを書いたりしながら、心の交流を図るようにします。また、教育相談などで1対1でじっくり話を聴く機会を持つこともよいことです。

#### 学級経営の中で

##### ・ 周囲の協力を求める言い方（例）

あらかじめ対象の子と行動や学習に関するめあてを話し合っておきます。そしてそれをもとに、次のように説明します（可能な限り本人のいないところで話を進めます）。

実はAさんは、みんなと仲良くお話がしたいと思っています。だから、どうやったらうまくいくか先生といろいろ考えました。そして、お話しするときのめあてを、「ねえ、〇〇さん」と名前を呼び、返事を聞いてから始める、ということにしました。

時々できないときもありますが、とっても頑張ってやっているのです。みなさんはAさんが少しでもできていたらすぐ返事したり、「頑張ってるね」「ちゃんと名前言えたね」と励ましてくれると先生はとってもうれしいです。



## 生活に関すること⑥

### Q21. 友だちとのコミュニケーションが苦手な子どもへの支援の手だては？

#### つまづきの背景



- 相手のことばや話の内容が理解できていない
- 自分の気持ちや状況が自分でもよく分からない
- 話したいことはあるがうまく言葉で表現できない
- 会話成立のスキルを獲得していない
- 場面の状況を相手がどう感じているかを理解するのが難しい

#### 手だて

##### ○ 理解できることばで質問したり話しかけたりしましょう

私たちは、分かっているだろうと思って話したり質問したりしていますが、実は子どもたちには理解できていないことがあります。話を聞きながら類推し、理解していくことが難しい子どもや、理解している言葉が少ない子どもは、相手の話の内容や言葉がわからず戸惑っていることがあります。具体的で分かりやすい言葉に言い直したり、短い文で話しかけたり等の工夫が必要です。

##### ○ 子どもの気持ちや状況を大人が言語化しましょう

「～だから、びっくりしたんだね」「～が嫌だったんだね」「今は～な気持ちなのかな」と、子どもの気持ちを言葉にすることで、子ども自身が自分の気持ちに気付くとともに、言葉の引き出しを増やしていくことにつながっていきます。また、「自分の気持ちを分かってくれた」という思いが、コミュニケーション意欲を高めることにもなります。

##### ○ 会話の基礎的なスキルを整理し、確認するようにしましょう

大人とのやりとりの中で、会話は「聞き手と話し手」の役割を交換しながら進めることを教えます。そして、「一方的に話さない」「相手の反応を見ながら話す」「うなずいたり相槌をうったりしながら聞く」などのスキルを教えます。

##### ○ 好きな話題について一緒に楽しむ時間をつくりましょう

いつもルールに従って、相手に合わせるばかりの会話では、話すことへの意欲を失ってしまいます。休み時間や放課後等に、子どもの興味がありそうなことについて教師から話しかけ、好きな話題を一緒に楽しんでみましょう。

##### ○ 状況の理解を促すような関わりを続けましょう

言葉そのものよりも、対人関係や社会性の問題がある子どもには、スキル獲得の場の設定とともに、経験の中で学ぶ機会を作っていく必要があります。日常生活の様々な場面で、「今どのような状況で、周りの人はどのように感じているか」わかりやすい言葉で伝えていくことが必要です。

#### 学級経営の中で

- 授業でその子が発言した言葉はしっかりと受けとめ、足りない言葉を教師が補って気持ちを確かめていくようにしましょう。発言をしなければならない場面では、教師が寄り添い、補助しながら安心して発言できるような環境をつくりましょう。

- 授業中の発言で、周りの状況を考えず、一方的に自分の考えを述べてしまうようなときには、発言を一度制して「〇〇さんが言いたいことはこういうことかな」と考えを確認するようにします。また、グループ活動では、その目的・内容・時間などを明記し、話し合いの進め方などの手順をカードにまとめておくとい良いでしょう。また、状況に応じて周りの人がどのように感じているのかを伝えていくことで、自分がどのように対処すればよいのかを考えていくようにしましょう。
- 言葉はコミュニケーションの手段の一部です。言葉で伝えることが苦手な場合は、言葉以外の方法（手で合図する、気持ちを表すカードを活用する等）を子どもと一緒に考え、コミュニケーション意欲が低下しないような配慮が必要です。その上で、上記のような表現するための支援をしていきます。
- トラブル等があったときは、子どもにすべてを説明させるのは困難な場合が多いので、周りの子どもたちに状況を聞いて本人に確認したり、話を聞きながら絵や図で描いて確かめたりする方法もあります。そして、本人の状況や気持ちを周りの子どもたちに伝えることも大切です。また、子どもの表現が不十分だったり、単語や二語文だったりするときは、足りない言葉を補い、好ましい話し方で「～は～なんだね。」とモデルを示しましょう。たどたどしくても話をしようとしているときには、話の途中でことばを挟んだり、終わらせたりせず、最後までしっかり聞くことが何より大切です。



## 生活に関すること⑦

### Q22. 状況や相手の気持ちが読めずに、自己中心的な発言や行動をしてしまう子どもへの支援の手だては？



#### つまづきの背景

- 相手の表情やしぐさから気持ちを読み取ったり、相手の立場になって考えたりすることが苦手
- 「こうすれば～になるだろう」と、次の反応を予想することが苦手
- 集団の中で自然に身につける常識的なことやルールを知らない
- 勝敗や順番、自分のやり方にこだわってしまう
- 衝動的に行動してしまい、自分の行動をコントロールできない
- 失敗や叱責された経験が重なり、自己評価が下がっている



#### 手だて

##### ○ 「どうすればいいのか」を具体的に説明しましょう

「だめ」という禁止や「よく考えてごらん」といった漠然とした問いかけではなく、「～のときは～のようにするといいいね」と、モデルを具体的に説明します。

トラブルになったときは、落ち着いてから教師が仲立ちして状況や互いの言い分、気持ちを整理し、それぞれに分かりやすく伝えます。

##### ○ 分かりやすくルールを示しましょう

遊びや体育・学級活動でのゲームなどのルールを理解していないことがあります。そのため自分勝手に動いて、ルールを無視しているように見ることがあります。活動する前に、板書やカードを活用したり、実際に見本を見せたりして具体的にルールを示すと分かりやすくなります。

##### ○ 気持ちを言語化しましょう

相手の気持ちが分かりにくい場合、自分自身の気持ちも言語化できないことが多いので、「今～が～したので、イライラしているんだね」等、周りの大人が言葉にすると自分の気持ちを整理しやすくなります。また、言語化することで自分の気持ちが分かってもらえたと感じたり、相手の気持ちを考える手がかりになったりします。

##### ○ 自分の言動にブレーキをかけられる方法を子どもと一緒に考えましょう

自分の行動のめあてや約束・方法を子どもと相談し、友だちに配慮できたときや、少しの間でも我慢できたときには、努力している点を認め、評価します（表やグラフ等を使い、分かりやすく）。また、気持ちを切り替える言葉を練習します（「ドンマイ」「次がある」「失敗は成功のもと」等）。

##### ○ 自分のよさに気づく言葉かけをしましょう

すでにできていることや、うまくいったことを認める言葉かけを心がけましょう。子ども自身が自分のよさに気づき、そのことが自己コントロール力の向上につながります。

#### 学級経営の中で

- 状況や相手の気持ちが分からないことによって、非難されたり疎外されたりしやすいので、休み時間の過ごし方については特に十分な配慮が必要です。
- クラス全体のルールについては、守れないときに注意するだけでなく、守れたときにも言葉をかけることが大切です（他の子どもたちに対しても）。プラスの評価がルールの理解や定着につながります。

- 学級活動や道徳等の時間を活用し、クラス全体で相手の気持ちを考えたり、自分を表現したりする活動やゲーム等を行います（下記の例参照）。

【具体例】

- **あったか言葉・チクチク言葉**（「ソーシャルスキルマニュアル」明治図書より）

導入： 「言葉には、人をいい気持ちにする言葉、嫌な気持ちにする言葉があります。今日は言われてうれしい“あったか言葉”，言われて嫌な気持ちになる“チクチク言葉”の勉強をします。」



話し合い： 子どもたちと話し合い、今までの経験から“あったか言葉”や“チクチク言葉”の例を出します。

ゲーム： 「“あったか言葉”を言う “チクチク言葉”を言わない」をめあてとして、室内ゲーム（フルーツバスケット、何でもバスケット等）をします。

ゲーム中やゲーム後は、「今のは“あったか言葉”だね」「ちょっと言っちゃったけど、その後がまんできたね」と肯定的に評価します。

振り返り： ゲームの後、自分が言ったり言われたりした“あったか言葉”を発表し合います。

事後指導： 他のいろいろな活動場面でも機会を見つけて、「今のは“あったか言葉”だね」「“あったか言葉”をたくさん使えたね」とその都度、肯定的にフィードバックします。

話し合った“あったか言葉”を教室に提示し、活用します。

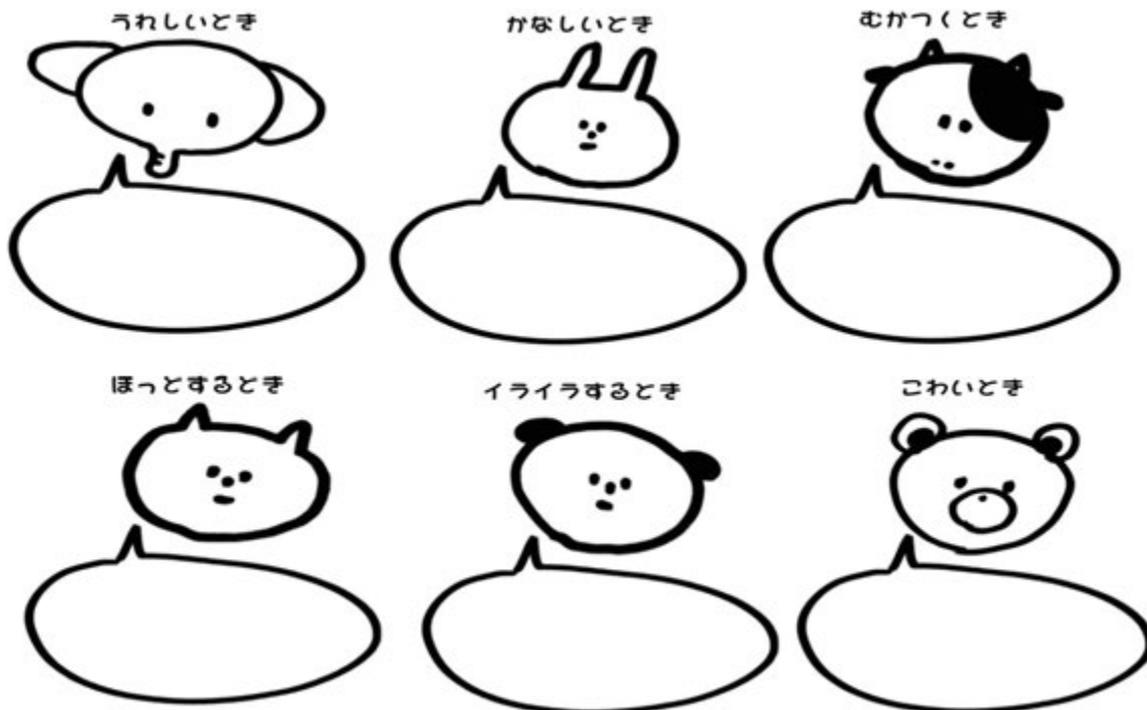
- **どんなとき？**（「自己表現ワークシート」図書文化より）

導入： 安心して書ける雰囲気づくりをし、ワークシートには正解や間違いがないことを伝えます。

書く： 自分の気持ちに意識を向けるとともに、書くことで自分の気持ちに気づくことができます。書いたワークシートは自分を表現した大切なものとして扱います。

話し合い： いろいろな感じ方があることに気付くことができます（初めに、友だちの発表を笑ったりからかったりしないことを確認します）。

事後指導： むかついたり、イライラしたりしたときの解消方法を話し合う機会を設けることにより、自分の気持ちをコントロールする手がかりを得ることができます。



上記はワークシートをもとにした例です。「自己表現ワークシート」にはそのままコピーできるシートがついています。

## 生活に関すること⑧

### Q23. 自分の都合の良いように話を作ったり、うそをついたりしてしまう子どもへの支援の手だては？



#### つまずきの背景

- しかられたり、非難されたりすることを避けたい心理がある  
→とりあえずその場をしのごう。しかられるのは嫌だな。
- 苦手なことやできないことを隠したい心理がある  
→こんな自分を知られたくない。
- 事実を認めずに正当化したい心理がある  
→自分なりに理由があったんだ。
- 友だちや教師の注意を引きたい心理がある  
→周りの人は何て思うのだろう。こんなこと言うと驚くかな。
- 相手に安心感を与えたい心理がある  
→お母さんに心配かけたくない。
- 相手に媚びる、気に入られたい心理がある  
→相手に嫌われたくない。冗談やひょうきんなことを言って笑ってもらおう。

#### 手だて

##### ○ 悪循環を防ぎましょう

「うそをつく→信じてもらえない→ますますうそをつく→ますます信じてもらえない」という悪循環を引き起こさないようにするため、その場ですぐに責めずに、うそをつかなかったときのことをほめたり、その子が認められたりしていくように、全体に発信していくことが大切です。

発達障がいのある子どもが、悪気なく作り話をすることもあります。明らかにうそのときはそれ以上そのことを聞かない、場面を変えるなどの方法が有効です。

##### ○ 共感的な態度で話を聞きましょう

うそをついたときには、まずその子の気持ちを聞き、わかろうとする姿勢が必要です。「うそをつくあなたは悪い子」ではなく「あなた（人格）は悪くはないが、うそをつくこと（行為）はよくない」というスタンスに立って考えることが大切です。

##### ○ 一緒に考えましょう

同じような状況になったら今度はどうすればよいかを考えさせましょう。その際うそをつく以外の方法を考えたり、自分に正直になるための方法を一緒に考えたりしていきましょう。

#### 学級経営の中で

- うそには、これまでの対人関係における誤学習で意識的にうそをついてしまう場合や、本人にはあまり自覚されないうそと現実の境界が曖昧になってしまうような、無意識的なうそをついてしまう場合があります。なぜ事実と違うことを言う必要があるかの状況が判断できれば、うそをつかざるを得ない心情を理解し、子どもの内面の世界にかかわっていくことができるようになります。
  - うそをつくのが日常化すると、周囲の友だちとの信頼関係が薄れ、好ましい人間関係が築けなくなってしまう可能性があります。周囲の子どもたちへの指導や配慮も必要になってきます。

(例)

私たちの生きている世界の中には、様々な人がいるのだということを、周囲の子どもたちに、知ってもらいます。みんなと同じように行動したり、考えたり、生活したりしたくても、うまくそれができない人もいるのだということです。そして上手にできないことなどがあるときに、互いに支え合わなければならないことは当たり前であることも伝えます。それらを知ってもらうことで、うまくできない人の手助けをするために、「特に配慮が必要となる場合もある」ということが、理解されると思います。

(例)

どうしても欠点ばかりが目が行きやすくなってしまいますが、長所も認めさせるようにします。それによって、「ああ、こんないいところもあるんだ」と気づかせ、その子を同じ仲間として受け入れられるようにします。よいところを認識させることで、周囲との関係を修復させることができるかもしれません。そのためには指導者が、常に長所を見つけ、伸ばしてやるのが大切です。

(例)

その子に対応する際、気をつけてほしいことを周囲の友だちに知らせておいた方がよい場合もあります。(ケースによっては本人がいない場面で行うことになります。)例えば、何かトラブルがあったときには、その子に対して否定的な言葉を使うのではなく、「具体的に何を、どうしたらいいのか」を丁寧に教える(言語化)ことが大切であると伝えておくということなどです。

## ※ カミングアウトについて

学級経営が比較的うまくいっていて、子ども同士の関係もよく、そして保護者の同意が得られるならば、その子の特性(障がい)について周囲の子どもたちに伝えることも、場合によっては必要です。その子のこだわりや注意力のなさ、衝動性など何が原因で起こるのかわかると、子どもたちも納得し、さらに配慮を深めることができるからです。

ただし、新たな差別を生んでしまうことも考えられるため、慎重に進めていかなければなりません。



## 家庭環境に関すること①

### Q24. 基本的な生活習慣の改善のための、家庭との連携の方法は？

家庭の生活スタイルや生活時間に立ち入ることは、なかなか難しいことです。また、何より保護者非難につながりやすい内容でもあるので、慎重な対応が望まれます。



#### 学校全体の問題と捉えることから

- **児童生徒対象の生活習慣調査** ※問題となる児童だけの対応ではなく学校全体の問題と捉えます。  
〈 調査用紙例 〉

生活習慣調査 ー規則正しい生活していますか？ー		年 組( )	名前
1 睡眠	ア 何時に寝ますか。	時頃	
	イ 夜は、何をして過ごしていますか。		
	ウ 何時に起きますか。	時頃	
	エ 自分から起きていますか。	毎日・時々・起こしてもらう	
2 朝食	ア 朝食は、食べていますか。	毎日・時々・食べない	
	イ 朝食は、家族と食べますか。	毎日・時々・一人で食べる	
3 排便	ア 朝、排便をしていますか。	毎日・時々・決まっていない	
4 入浴	ア 風呂に入っていますか。 ※シャワーも可	毎日・時々・ほとんど入らない	
5 家庭学習	ア 宿題をやっていますか。	いつも・時々・ほとんどやらない	
	イ 決まった時間にやっていますか。	いつも・時々・決まっていない	

- **調査結果を活用した保護者への啓発・相談**

学級懇談・学校だより・保健だより → 個別懇談・家庭訪問

〈啓発の内容〉学級懇談での話の例

一つの不規則な生活要因が生活全般の不規則さに広がっていき、学校生活にも影響を及ぼしていく構図を示し、一つの生活の見直しが、生活全般を変えていくことへの理解を促します。それには、保護者の役割が大切であることも自覚させていきます。

【事例から】 先日、朝から顔色が悪く、元気のない児童がいたので、「昨日は、何時に寝たの？」とたずねると「11時までゲームをしていた。」との答えが返ってきました。朝は寝坊して、朝食もほとんど食べていなかったとのこと。一つの不規則な出来事が、他の家庭生活にも影響を及ぼし、学校生活にも大きく関わってきてしまいます。

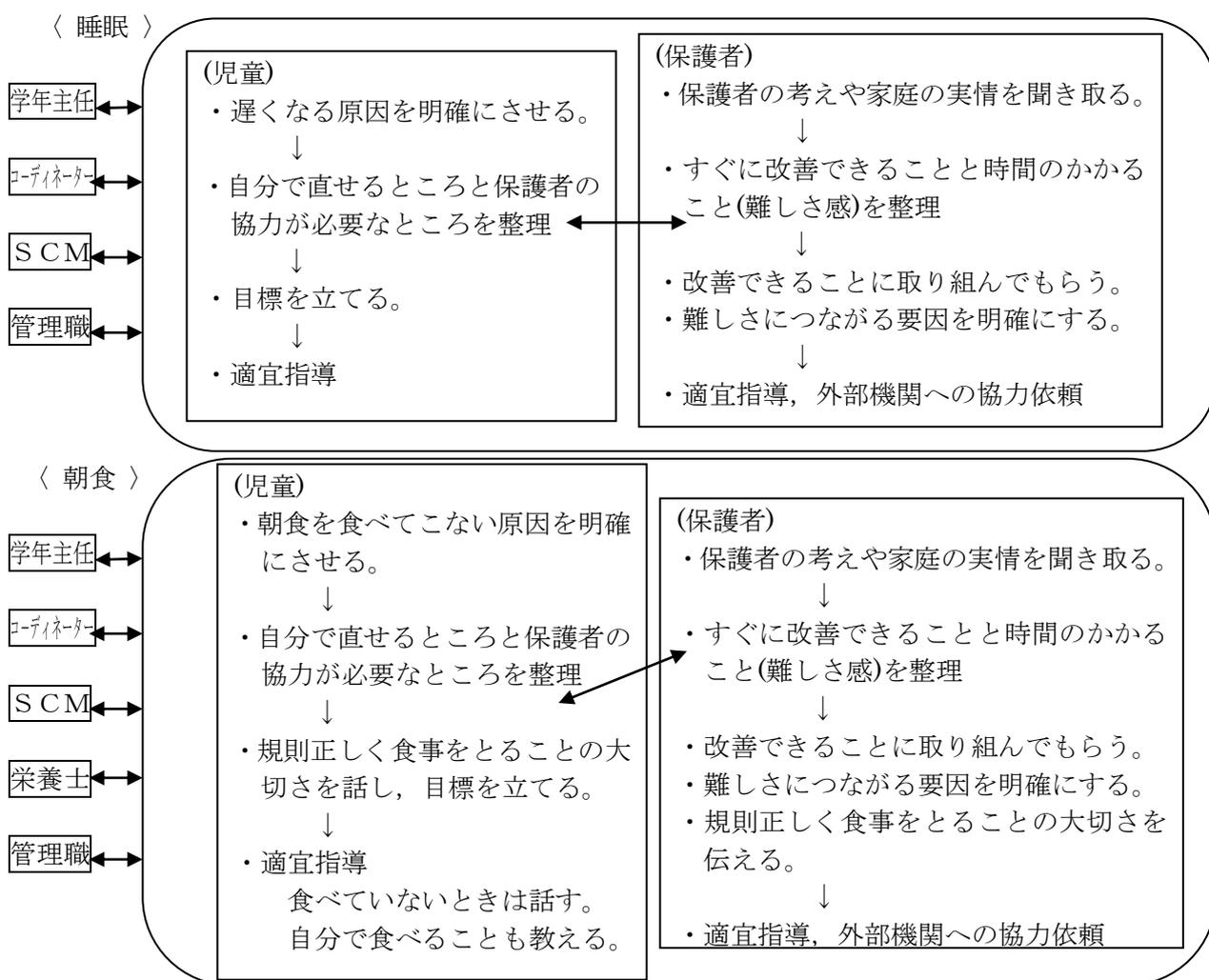
【調査結果から】 「寝る時刻」「起きる時刻」「朝食」「排便」の関係を調査結果から示す。「寝るのが遅い子」と「寝るのが早い子」の生活の様子や時間の使い方を比較する。  
→ どこから改善できるか、保護者それぞれの経験をもとに話し合う。

## 支援の必要な児童生徒への指導と保護者との連携

### ○ 保護者との連携の留意点

- ・ 学校の様子を伝えることで、保護者は「この子が…しないから自分が恥ずかしい思いをするんだ」という意識から、急に子どもに強い態度で接するようになることがあるので、保護者が大変な状況の中で頑張っているという意識をベースに、話を進めます。
- ・ 主体者は保護者なので、継続してできることから始め、保護者の成功経験や達成感・充実感が得られるように配慮します。
- ・ 特に、取り組み始めのころは定期的に連絡を取り、方法・対応が保護者の負担過重になっていないか、児童生徒の家庭での様子はどうかを聞くようにします。
- ・ 一度決まったことについては、実際に家庭でどう実践されているか、成果はどうかにかかわらず、協力してくれてありがたいというメッセージを発信し続けます。

### ○ 対応の流れの例



- 「大変な子だ!」「困った保護者だ!」という被害者意識で望むことは、なかなか解決につながらないものです。できない自分をもつ児童や保護者を認め、小さなことから始めて自信をもたせることが大切です。それでも解決の糸口が見つからなかったら、同僚や先輩に相談し、学校全体でかかわっていくことも大切です。さらに、学校を助けてくれる頼りになる外部機関の力を借りることも思わぬ近道になります。解決に当たっては、解決を急ぐあまり人間関係を難しいものにしてしまうことは考えものです。長く付き合うつもりで対応する懐の深さも大切です。担任の思いは、何よりも大きな解決につながります。

## 家庭環境に関すること②

### Q25. 特別な支援が必要な子どもの保護者に、理解を得るための手だては？ 周囲の保護者に、理解を得るための手だては？

他の人から自分や子どものマイナス面を指摘されるのは、誰でも嫌なことです。でも、信頼している人からの指摘であれば、それは自分を思って言ってくれている、だから「ありがたい」と思えます。つまり、同じことばでも、基本的な信頼関係ができているかどうか、保護者を動かす原動力になっていると言えます。

#### 担任の保護者への対応の在り方

- 否定的な考え方や対応 → 結果的に非難になってしまう
  - ・ このままでは、将来大変なことになってしまうと思っている。
  - ・ トラブルや学習の遅れがあることは、よくないことだと思っている。
  - ・ 周囲の迷惑になる子だと思っている。
  - ・ 家庭への連絡は、主に問題があるときにしている。
  - ・ 家庭でしっかり指導して欲しいと伝えている。

このような考え方や対応が重なると、保護者は、「自分の子どもはダメな子、そして自分もダメな親」という意識になると同時に、そういう対応の仕方の学校に不信感を抱くようになり、適切な話し合いや問題の理解にはつながりません。

- 肯定的な考え方や対応 → 支援の必要性の理解を促す
  - ・ 保護者の良き理解者となる。
  - ・ 児童生徒への指導について保護者への連絡を怠らず、信頼関係を築いていく。
  - ・ 必要に応じて支援の役割を分担し、思いを共有する。
  - ・ 学校での成果をもとに家庭での対応を検討する。
  - ・ 事例を示したり、SCの協力を得たりしながら、支援の必要性について理解を促す。

#### 〈 理解を目指す保護者面談の例 〉

- ・ 子どもの様子をみていて、・・・に心配を感じる。
- ・ それについて、自分は何か支援をしていきたいと思っている。
- ・ そのための手がかりや情報が欲しいので協力していただければうれしい。

#### ( 話し合い )

- ① 家庭での様子に変化はないか。
  - ② 実は学校でこんなことがあったが、家の中で・出かけたときなど、今まで似たようなことはなかったか。
  - ③ 学校ではアとかイとかの対応・配慮をしようと思っているが、保護者としてはどちらの方が効果的だと思うか。またそれはなぜか。
  - ・ 保護者の選んだ方策を実施しようと思うが、可能なら家でも～をしてもらえるとありがたい。
  - ・ 家庭で困っていることがあったら、いつでも連絡して欲しい。
- ※ 保護者が様々な思いを伝えてきたときは、内容の善し悪しにかかわらず共感し受けとめる。

上記④⑥⑦のようなやり取りの中で、子どもの言動を振り返ったり、自己選択・決定を促したりする話し合いを継続的に持つことが、保護者が子どもの実態を理解していく近道になります。

## 周囲の保護者の理解を得るためには

### ○ 担任による対応

ア 保護者が障がいに触れて説明することに理解を示しているとき

- ・ 障がいによる行動の特徴や心の状態を説明します。
- ・ 個々が持つ特性の一つであることにも触れます。
- ・ 問題となった出来事や事例を示しながら、特徴的な行動への理解を促します
- ・ 親の思いを十分聞いて、受けとめます。
- ・ 社会生活適応のために、保護者として、地域の一員としてできることを一緒に考えます。

イ 保護者が障がいに触れて説明することを望まないとき

- ・ 問題となった出来事を取り上げ、不可解な行動がわがままではなく不得意であることを説明します。 ※2項目目からは、同様の対応

### ○ 研修の実施

- ・ 講演会の実施
- ・ 施設訪問

障がいをありのままに伝えることは、障がいの特性を正確に説明するということです。きちんと説明することで、これまでの不可解な行動への誤解を解き、正しい理解の深まりに役立ちます。障がいというレッテルを貼ることにならないよう、十分な配慮が必要です。

また、ハンディを背負う人が生きづらさを感じずに生きていける社会の実現には、障がいを持つ人やその家族の現実と向き合う姿勢も大切になってきます。もちろん、現実と向き合えたときに、それを支える心を、周囲の子どもの中にも、保護者の中にも育てておくことが必要でしょう。

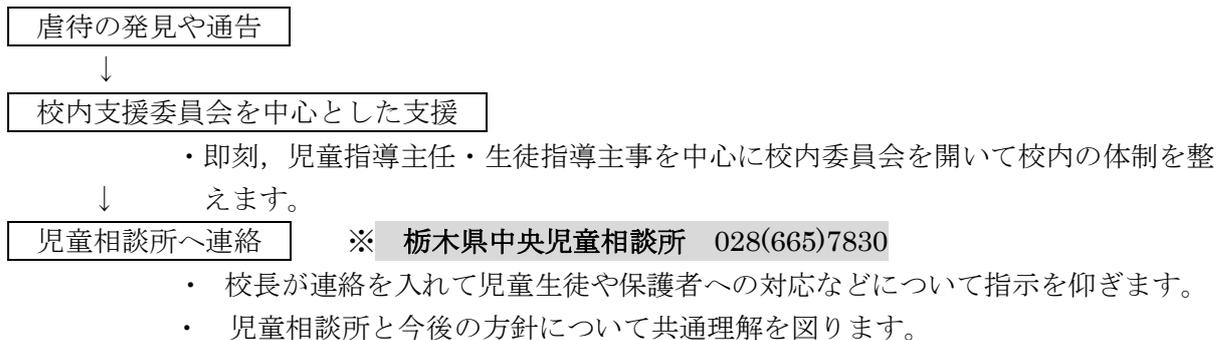


## 家庭環境に関すること③

### Q26. 虐待が疑われる際の対応や、関係機関との連携の取り方は？

この問題の大前提は、子どもの安全を第一に考えることと、必ず学校体制で取り組むことです。

#### 対応の流れ



#### 対応の具体策

- **初めて気づいたとき**
  - ・ 前日無かった外傷に気づいたら、子どもから話を聞きます。
  - ・ 話の内容から虐待が疑われるときは、管理職に伝え、状況によっては児童相談所に相談し指示を仰ぎます。
  - ・ できたら写真を撮っておきます（子どもには家の人には決して言わないことを約束します）。
- **虐待と疑えることが続くとき**
  - ・ 外傷や家での生活について、子どもに話を聞きます。どんなに辛くても、親に見放されたときの不安等から正直に話さないことも多いので、無理強いせず、子どもの心情に十分に配慮しながら進めることが大切です。
  - ・ 外傷は、写真を撮っておきます。
  - ・ 他のことを理由に家庭を訪問し、様子を見てきます。（欠席したとき、忘れ物を届けるなど）
  - ・ 子どもの安全を考えると、安易に率直な話はできません。
  - ・ 管理職と協議の上、児童相談所に相談・通報します。場合によっては、保護されることもあります。
- 子どもも保護者も、正直には言わないことが多いため虐待と判断することには難しさがあります。また、子どものこれからの生活のことを考えると、保護者と切り離す判断をしても良いのかという迷いもありますが、子どもの生死にかかわることでもあります。学校は、多くの判断資料を示せるようにし、児童相談所等の関係機関の専門的な判断に任せることが必要です。



## 家庭環境に関すること④

### Q27. 関係機関につなぐための手順と、その際の保護者との連携の取り方は？

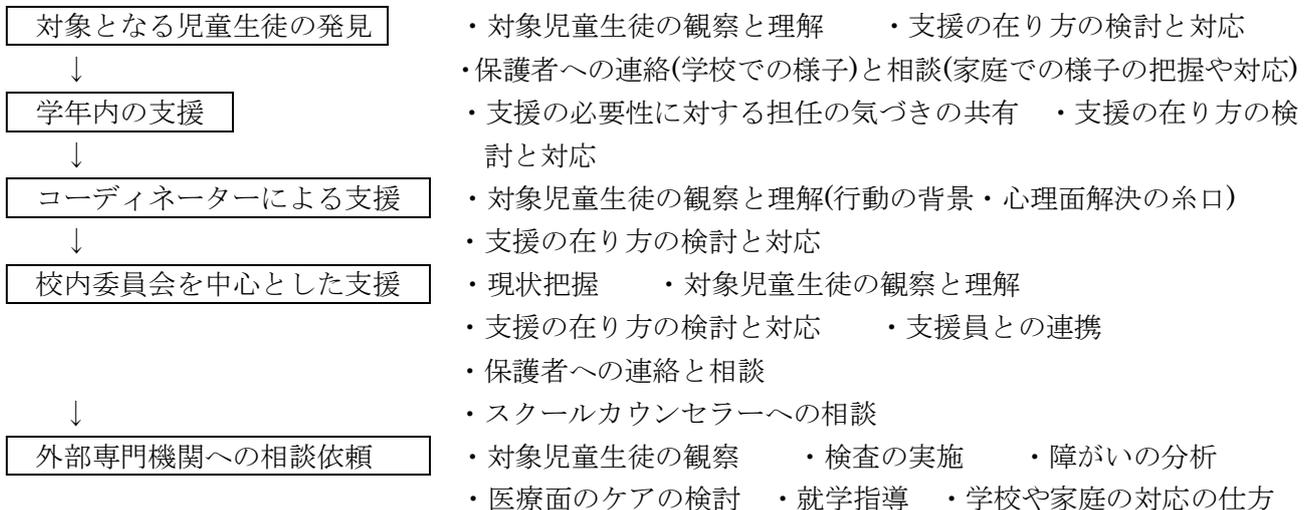
通常学級における学習や生活において、特別な支援の必要性を感じる子どもに出会ったとき、私たちは迷うことなく、子どもたちの将来を見据えて一歩を踏み出すことが大切です。それは、その子自身にとっても大切な一歩となりますが、同じ学級に在籍する子どもたちにとっても大切な一歩になります。

#### 保護者の理解を得るには

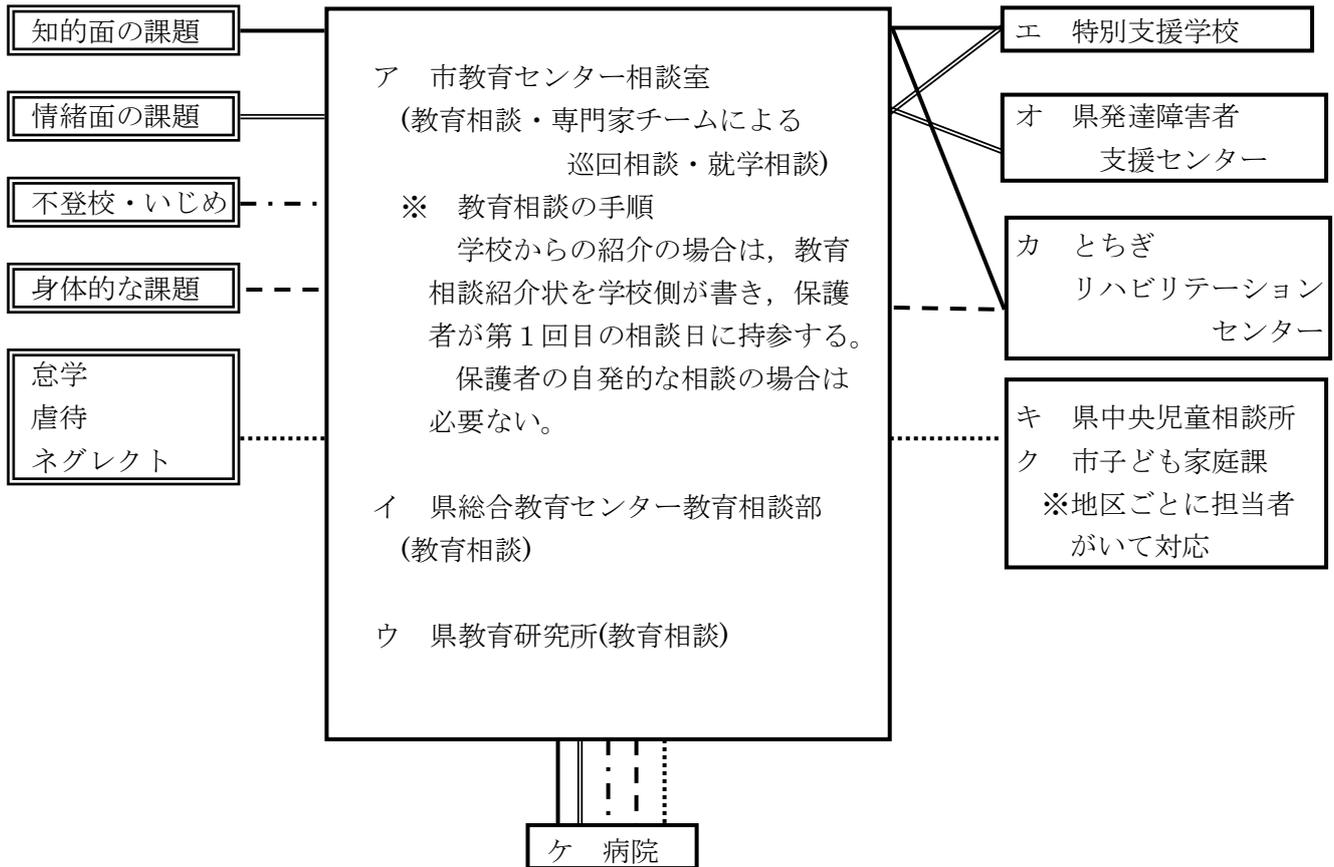
支援の必要性に気付いたとき、知識や経験で安易に判断せず、手順を踏んで保護者の理解を求めていくことが大切です。

まず、問題となる具体的な事実を捉えたとき、保護者に子どもの教室での生活状況を正しく伝えたり、授業の様子を見てもらったりして、その子にとってどのような課題や困難な点があるのかを、子どもの立場で一緒に考え理解してもらう必要があります。その際、保護者自身が自分の子を何とかしようという気持ちになるのを待つことが重要です。そのためには、学校が保護者の理解者となり、一緒に歩いていこうという姿勢を見せることが大切です。そして、保護者と理解し合いながら、支援の在り方を検討したり対応したりしていくことで、保護者の心が次第に開かれ、我が子を認めることにもつながります。

#### 外部専門機関へつなぐまでの手順 < 支援の流れ >



## 支援の内容と外部関連機関



### 〈 連絡先 〉

ア	028(639)4380~1	〒320-0816 宇都宮市天神 1-1-24
イ	028(665)7210	〒320-0002 宇都宮市瓦谷町 1070
ウ	028(621)7274	〒320-0066 宇都宮市駒生町 1-1-6 栃木県教育会館 2階
エ	市内にある特別支援学校 視覚障がい 盲学校 028(652)2331 聴覚障がい 聾学校 028(622)3910 知的障がい 宇大附属特別支援学校 028(621)3871・富屋特別支援学校 028(665)2281 肢体不自由 のざわ特別支援学校 028(689)2655・わかくさ特別支援学校 028(622)3650 病弱・虚弱 岡本特別支援学校 028(673)3456	
オ	028(623)6111	〒320-8503 宇都宮市駒生町 3337-1
カ	028(623)7010	〒320-8503 宇都宮市駒生町 3337-1
キ	028(665)7830	〒320-0071 宇都宮市野沢町 4-1
ク	028(632)2390	〒320-0818 宇都宮市旭 1-1-5
ケ	県内にある病院 ・自治医科大学附属病院（とちぎ子ども医療センター） 0285(44)2111 ・獨協医科大学病院（とちぎ子ども医療センター） 0282(87)2199 ・国際医療福祉大学クリニック 0287(24)3028	



## 【参考文献一覧】

- ・ LD、ADHDなどの子どもへの場面別サポートガイド  
— 通常の学級の先生のための特別支援教育 —  
(編著者：高橋あつ子、発行所：ほんの森出版株式会社)
- ・ 〈教室で気になる子〉LD、ADHD、高機能自閉症児への手だてとヒント  
(著者代表：黒川君江、発行所：株式会社 小学館)
- ・ 学習・集団行動等につまずく子どもへの支援のあり方Ⅰ・Ⅱ  
(栃木県教育研究所 特別支援教育研究部会)
- ・ 特別支援教育早わかり (黒川君江ほか著 小学館)
- ・ 漢字と学ぶ，漢字で学ぶ (卯月啓子著 東洋館出版)
- ・ H17年度 特別支援教育豆だより (市教育センター 発行)
- ・ 通常の学級担任のための指導ヒント集 “特別な教育的ニーズがある子への支援”  
(東京コーディネーター研究会)
- ・ 自閉症児の特別支援 Q&Aマニュアル 通常の学級の先生方のために  
(廣瀬由美子・東條吉邦・加藤哲文 編著 東京書籍)
- ・ 教室でできる特別支援教育のアイデア 中学校編  
(月森久江編集 図書文化社)
- ・ 教室でできる特別支援教育のアイデア 小学校編，part 2，  
(月森久江編集 図書文化社)
- ・ ソーシャルスキルマニュアル (上野一彦・岡田智編著 明治図書)
- ・ 実践ソーシャルスキル教育 (佐藤正二・相川充編 図書文化社)
- ・ 閉じこみ式 自己表現ワークシート (諸富祥彦・大竹直子著 図書文化社)
- ・ エンカウンターで学級が変わる (国分康孝監修・岡田弘編集 図書文化社)
- ・ 一人一人の教育的ニーズに応じた支援のために (栃木県教育委員会)
- ・ 宇都宮市の特別支援教育—平成19年度の状況— (宇都宮市教育委員会)

## **通常の学級で行う特別な支援の在り方**

—授業や学級経営の中で行う特別支援教育—

発行：平成21年4月

宇都宮市教育委員会 教育センター

〒320-0816 宇都宮市天神 1-1-24

TEL 028-639-4381

FAX 028-639-4390

E-mail [kids@ueis.ed.jp](mailto:kids@ueis.ed.jp)